

身近な考古学の世界を楽しもう！

白石哲也 編

# 仮家塚遺跡！

かりやづかいせき

今から

約2200年前。

南房総には

コメ作りを初めて行ったと

考えられる人たちが

住んでいた？

南房総最古の農村を探して



杉山祐一  
小倉淳一  
池田治  
杉山功成  
佐藤兼理  
根本岳史  
小林嵩  
千葉まい子  
廣田哲徳

# 目次

## ブローグ

(白石哲也)

4

- ① 仮家塚遺跡とは？
- ② 調査の歴史
- ③ ブックレットの構成

## 1 時代と文化

### 弥生時代と仮家塚遺跡

(白石哲也)

10

- ① 弥生時代と弥生文化

## 「コラム」 仮家塚遺跡とは何か (白石哲也)

13

## 2 農耕集落

### その誕生と社会変動

(杉山祐一)

16

- ① 稲作のはじまり

—— 紀元前2世紀～紀元前1世紀頃 (弥生時代中期後葉)

## 3 土器

### 稲作農耕社会を物語る宮ノ台式土器

(小倉淳一)

22

- ① 弥生土器とは
- ② 宮ノ台式土器の発見
- ③ 宮ノ台式土器の時期細分と位置づけ
- ④ 仮家塚遺跡の宮ノ台式土器

## 4 地理と考古学調査

### 南房総の歴史はどう解明されてきたか

(池田 治)

28

- ① 南房総の地理的特徴
- ② 南房総の考古学調査の歴史
- ③ 南房総の考古学調査の特徴

〔コラム〕人が動く、石器も動く！（杉山功成）…… 37

## 5 住居

房総半島の竪穴住居と仮家塚遺跡が重要な理由

（佐藤兼理）

38

- ① 竪穴住居とは何か？
- ② 弥生時代の房総半島の竪穴住居
- ③ 発見！仮家塚遺跡の竪穴住居

〔コラム〕発掘ってこんな感じ！（根本岳史）…… 44

- ① どうして時期がわかるの？
- ② 学術調査と緊急調査
- ③ 調査計画
- ④ 確認調査
- ⑤ 本調査
- ⑥ 記録保存
- ⑦ 整理作業
- ⑧ 報告書の作成

## 6 墓

仮家塚遺跡の方形周溝墓と弥生時代のお墓

（白石哲也・杉山祐一）

50

- ① 弥生時代の墓制
- ② 房総半島の墓制

- ③ 弥生時代中期後葉
- ④ 弥生時代後期
- ⑤ 弥生時代終末期

## 7 石器

石の道具からわかる房総半島南端の生活・交流

（小林 嵩）

56

- ① 大陸系磨製石器
- ② 珍しい石庖丁
- ③ 漁撈に使われた石器
- ④ 弥生時代の祭祀具
- ⑤ 勾玉類の製作

〔コラム〕当時の小学生がみた調査の記憶と（千葉まい子）…… 62

〔コラム〕南房総の海蝕洞穴遺跡  
館山市大寺山洞穴遺跡を例に（廣田哲徳）…… 64

参考文献 66

執筆者一覧 68

①

仮家塚遺跡とは？





こんにちは。現在、僕たちは千葉県房総半島の南端に所在する南房総市仮家塚という弥生時代の遺跡の発掘調査を行っています。読者のみなさんは、「発掘」と聞くと何を思い浮かべますか？ 古代エジプトのピラミッドや南米ペルーのナスカの地上絵などが有名ですね。日本では、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）や三内丸山遺跡（青森県）などが教科書にも出てきます。しかし、そうした有名な遺跡ばかりではなく、私たちの身近なところにも、たくさんの遺跡が眠っているのです。

仮家塚遺跡は、登呂遺跡（静岡県）や吉野ヶ里遺跡に比べると、一般的には、あまり知られていないと思います。しかし、仮家塚遺跡は今から約2200年前に南房総でコメ作りを初めて行ったと考えられる人たちが住んでいた可能性のある遺跡であり、房総半島の歴史を紐解いていく上で、とても重要な遺跡です。

## ② 調査の歴史



# プーグ

で、人びとが住んだ集落が見つかっていませんでした。そこで、僕らは未調査部分に集落が展開していたのではないかと考え、今回の調査を開始しました。

仮家塚遺跡は、1986年に住宅建設の事前調査として、はじめて発掘調査が行われました。その後、1993年までに計7回の調査が行われ、複数の方形周溝墓（墳丘を作り、周囲を溝で囲ったお墓）と呼ばれる弥生時代のお墓が見つかりました。また、方形周溝墓から出土した土器の文様や器形から、弥生時代中期後葉頃（前2世紀頃）に作られたことがわかりました。これは、南房総の弥生時代では最古のお墓です。しかし、これまでの調査では方形周溝墓だけ

僕らの研究チーム（山形大学仮家塚遺跡発掘調査団）では、仮家塚遺跡の集落を探すことを目的として、2019年度から遺跡の分布調査（遺跡の広がりなどを調べる調査）や、過去に仮家塚遺跡の発掘調査で出土している遺物の検討などを行ってきました。そして、2021年度には遺跡の発掘調査を開始し、現在（2024年9月時点）までに計3回の調査を実施してきました。2023年度の調査は、大型の住居跡と思われる遺構が見つかり、そこに弥生時代の集落があった可能性が見えてきました。

### ③ ブックレットの構成





本ブックレットでは、仮家塚遺跡を中心に、考古学とはどのような学問なのか、考古学に関わる人たちの想いなどについて少しでも知っていただければと思い、執筆しました。

本書は、第1章から第7章までで構成されています。第1章では、弥生時代がどのような時代や文化だったのかをお話します。そして、第2章以降は、より具体的に農耕集落や土器、環境、住居、お墓、石器といったさまざまな角度から仮家塚遺跡を中心に南房総の弥生社会を見ていきます。多面的な視点から見ていくことで、今から約2200年前にはじまった南房総最初の農村のありようが見えてくると思います。また、他にも考古学に関するさまざまなコラムがありますので、ぜひ読んでいただき、考古学の世界を楽しんでいただければ幸いです。

# 1

## 時代と文化——弥生時代と仮家塚遺跡

仮家塚遺跡の人たちは船でやってきた？

時代と文化をどうとらえればいいのか

まずは基本を押さえて、南房総を考えてみよう

### ① 弥生時代と弥生文化

#### 9 弥生時代とは

仮家塚遺跡は、弥生時代の遺跡です。では、弥生時代はどのような時代だったのでしょうか。ここで、弥生時代について少しお話ししたいと思います。

1884年、東京都文京区弥生町でひとつの壺形土器が発見されました。これは、それまでの貝塚土器（縄文土器）や古墳から出土する土器と異なっていたことから、徐々に「弥生式土器」と呼ばれるようになりました（蒔田・野中1987）。そして、弥生式土器の時代を弥生時代と呼ぶようになります。これが「弥生時代」

のはじまりです。

しかし、現在ではこの定義はほぼ使われることはありません。今は多くの研究者が、1975年に佐原真さんが提唱した「日本で食糧生産を基礎とする生活が始まった時代」から「前方後円墳の出現」までを弥生時代とする考えを基礎としています（佐原1975）。ただし、研究者によっては、その定義に異論を唱える方もいます。ただ、少なくとも弥生時代は、縄文時代とは異なり、コメや雑穀（アワ・キビ）が主たる生産穀物となった時代と考えることは良さそうです。

もうひとつ、弥生時代の特色について話をしなくてはいけません。弥生時代は、大きく早期・前期・中期・後期の4時期に区分されます。早期は、ほぼ北部九州だけで使用されており、前期以降は日本列島全域（北海道島・琉球諸島を除く）で使用されるようになります。つまり、北部九州では他の地域よりも早く稲作農耕が始まったのです。

一方で、最初のころはコメが中心的な地域もあれば、雑穀が中



写真1 仮家塚遺跡から出土した土器の例（筆者撮影）

心となる地域があります。また、中期になると各地域で土器の文様の様相が大きく異なっていきます。そして、後期では、鉄製品が定着し、土器も徐々に齊一的（せいいつてき）な様相を示すようになっていきます。つまり、弥生時代は時期・地域によって大きく変容する時代と言うことができそうです。

これらをまとめると、弥生時代は灌漑（かんがい）（人工的に給水すること）を用いた稲作農耕が始まり、前方後円墳が出現するまでの時代であり、また、時期や地域によって社会・文化が大きく変化する時

代と定義できます。

### 9 弥生「文化」を形作る

次に、弥生時代の「文化」について、少し考えてみたいと思います。弥生時代の文化を省略して、「弥生文化」と言います。ただし、現在の日本列島全域が弥生文化であったかと言うと、そうではありません。例えば、北海道は狩猟・採集を中心とした縄文文化、奄美・沖縄諸島では漁撈を中心とした貝塚文化が展開していま

た。つまり、弥生文化は九州・四国・本州を中心に、続縄文文化や貝塚文化と接しつつ、稲作を基礎とした独自の文化を形成・展開していたのです。

さて弥生文化は、考古学者が捉える時空間的なまとまりを弥生「文化」として定義しています。このまとまりとは、遺跡から見つかった土器や石器、墓、住居、集落の構造などを共通するものとして、それらを「文化」と定義しているのです。一方で、私たちが普段意識している「文化」はそうではありません。例えば、「日本文化」と言った場合、自分たち（私たち）が主体的に文化を捉えます。つまり、文化を自分たちのものとして捉えるのです。ですから、「弥生文化」は考古学者によって定義が大きく変わる可能性があります。現在は、大きな枠組みとして、弥生時代のモノ（土器や石器など）の総体を「弥生文化」と呼んでいるだけなのです。弥生時代の人びとが主体的に「弥生文化」と呼んでいたわけではないということ。そこは、少し注意しないとけません。

つまり、弥生文化・続縄文文化・貝塚文化はいずれも考古学者が定義した文化であり、必ずしもコンセンサスの取れたものではなく、その時空間的位置づけは、今後も変化する可能性があるのです。

## 9 南房総の弥生文化

プロジェクトで、仮家塚遺跡は「南房総ではじめてコメ作りを行った遺跡」であるとお話しました。しかし、日本列島では、北部九州で約2900年前にはコメ作りが始まっています。それから約

700年後に、南房総でコメ作りが行われたのです。つまり、弥生時代は稲作農耕の始まった時代とよく言われますが、日本列島で一斉に始まったのではなく、徐々に西から東へと伝わっていったのです。

実際、仮家塚遺跡から出土した土器【写真1】の文様や形を分析すると、神奈川の方から東京湾を渡ってきた可能性が高いことがわかりました(白石2023)。僕は、仮家塚遺跡の人たちは船でやってきたと考えています。読者の方のなかには、「えっ？ 船で来ることができたの？」と思う方もいらっしゃるかもしれません。しかし、コメや雑穀を作る技術は、大陸から海を越えて伝わってきています。そして、日本列島各地で海のルートを使った広域の交流や人の移動・移住が行われていたこともわかっています。例えば、図1は、弥生時代の土器

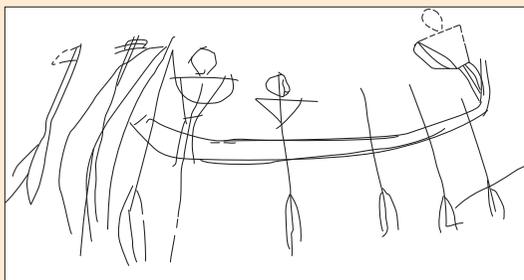


図1 絵画土器：船 (末永ほか1943をトレース)

に描かれた船の絵です。弥生時代の遺跡からは、しゅんこうぞうせん準構造船と呼ばれる縄文時代の丸木船を改良した船の一部が見つかっています。おそらく、コメ作りに適した場所を探してやってきたのでしょう。

(白石哲也)



## 仮家塚遺跡とは何か

### ④ 仮家塚遺跡の概要

ここでは、仮家塚遺跡の概要についてお話していきます。仮家塚遺跡は、南房総市府中（旧安房郡三芳村府中）に所在する弥生時代から平安時代にかけての遺跡です。遺跡は、愛宕山付近に源流をもつ平久里川下流の左岸に形成された標高17〜21メートルほどの河岸段丘上に立地していて、東には水田地帯が広がっています【図1】。

仮家塚遺跡が見つかった段丘は、現在の水田面より3メートルほど高くなっており、水田面から望むと小高い微高地となっています。なお、この前面に広がる水田地帯では古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺物が見つかったので、弥生時代以降もこの地に人が住んでいたことがわかります。また、仮家塚遺跡がある微高地上

は、おおむね平坦ですが、方形周溝墓が見つかった第6・7次調査地点【図2参照】を頂点として、南北および東にゆるやかに傾斜します。おそらく、弥生時代の人びとは一番見晴らしのいい場所にお墓を作ったでしょう。

今では遺跡周辺に住宅が建つものの、明治時代以降の迅速図（明治時代に陸軍によって作成された地図）や地形図、空撮写真を確認する限りでは、昭和50年代後半まで土地利用が畑の開墾にかぎられていたことが分かっています。つまり、地中に残る遺構は大きなダメージを受けずに今日まで保存されてきたものとみられます。

さて、仮家塚の地名については、中世や近世に記された文献には明確な記述はないものの、大正15年（1926）に安房

郡教育委員会が編さんした『千葉縣安房郡誌』の国府村の条に、「（安房国が）養老の制に復し、平郡に府を置くと。蓋し其の置府の位置は本村府中にして、假家塚と稱する一岡陵はその遺跡なりと傳へらる。然れども文献に徴すべきもなく、其の位置果たして假家塚なりしや否や知ること能わず（因みに假家塚は往昔安房九社の神輿是に渡御して假宮を造りし所とも云う）」（千葉県安房郡教育委員会編1921）との記述があり、安房国府の所在地かは不明なものの安房国の重要な地であったという伝承が地域に伝わっていたことがうかがえます。

安房国府の所在については、水田面はさんで南に広がる微高地もその推定地となっています。ただし、同地に所在する宝珠院遺跡からは、これまで弥生時代後期の

住居跡と円形の墳墓が3基ほど見つっていますが、国府に関する遺構・遺物は発見されていません。

また、室町時代の応永年間（1394～1428年）に開山した宝珠院の東には、中世後半から近世にかけて整備されたとみられる房総街道（房総往還）が通っており、北に広がる水田地帯を北上していました。この房総街道は、明治16年（1883）測図の迅速測図や明治36年（1903）測図の地形図には「主要なる府県道」として記されており、この地域の主要道路とされてきました。しかし、昭和40年代後半に行われた圃場整備により、水田区画の整備とともに道路の付け替えが行われ、水田内を通っていた房総街道はなくなりました。

そうしたなかで、仮家塚遺跡は、微高地と河川、直下に広がる低地という農耕集落を形成するうえで理想的な立地にあり、遺跡自体も後世の影響が少ないことから、方形周溝墓や隣接した集落域の発見などが期待されます。しかし、弥生時代にもあった可能性のある水田域と目される低地部分に関しては、水田区画の整備や道路の付け

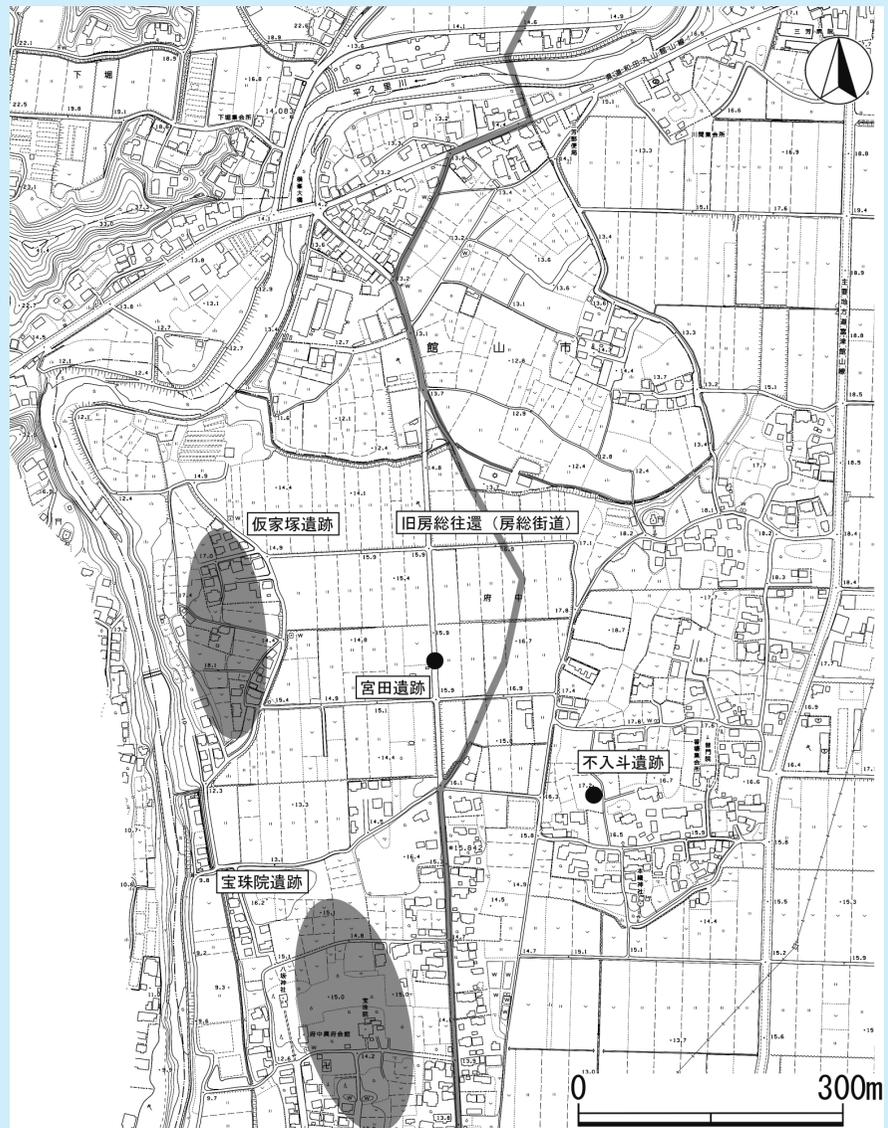


図1 仮家塚遺跡の位置と周辺遺跡（白石ほか2023）

替えといった大きな土地改変を受けており、弥生時代の水田を見つけるのは難しくです。

住宅建設に伴う発掘調査が実施されてきた【図2】（第1～5次：中野・新井1991、第6・7次：大淵・小川1994）。

これまでの調査経過

仮家塚遺跡では、過去7次にわたり個人

第1次調査は、1986年に行われ、弥生時代中期の方形周溝墓1基と近世溝2条が見つけられました。

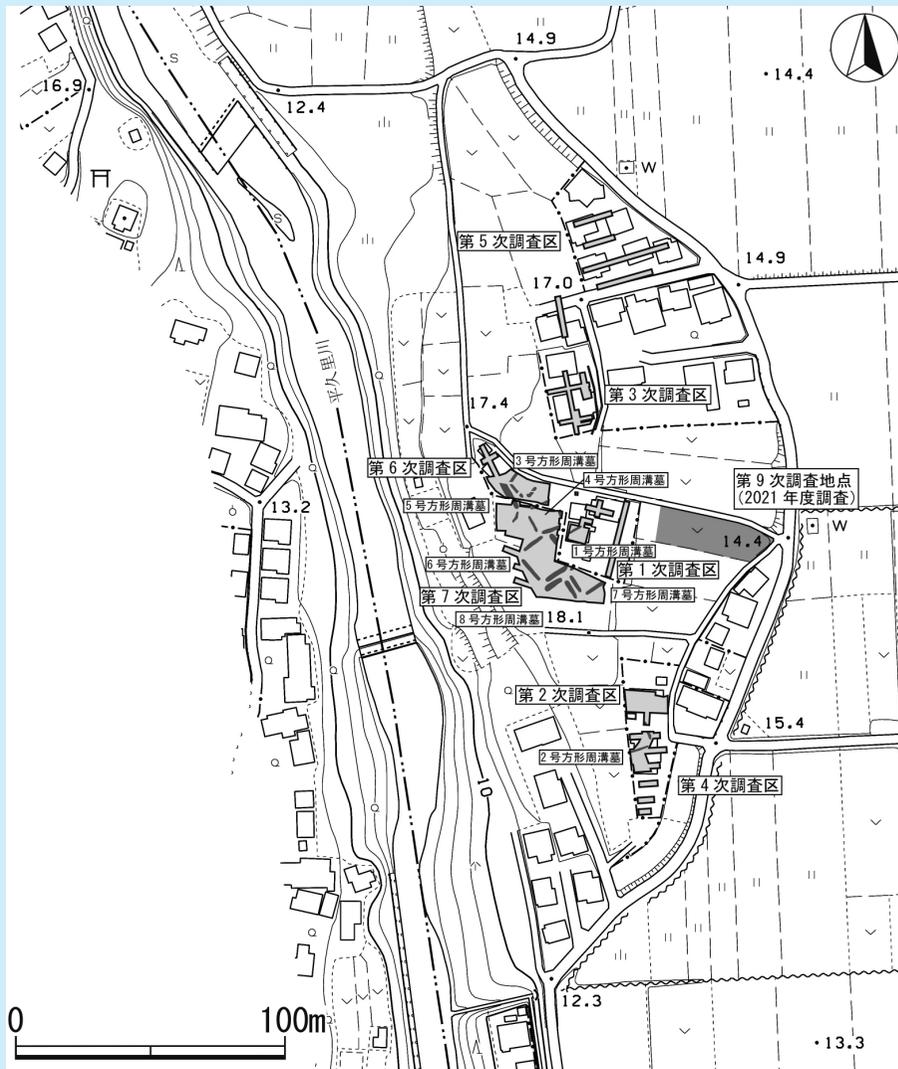


図2 仮家塚遺跡の調査地点（白石ほか2023）

1989年には、**第2次・第3次調査**が行われ、台地南側で実施された**第2次調査**では古墳時代前期の**竪穴住居跡2軒と弥生時代中期の方形周溝墓1基**が見つかっています。さらに、**第1次調査区**の北西側で

実施された**第3次調査**では、弥生時代中期の**土坑1基と時期不明の土坑1基及び溝1条**が調査されました。そして、1991年には、**第4次・第5次調査**が行われ、**第2次調査区**の南側に隣

接する台地南端部で実施された**第4次調査**では、弥生時代中期の**方形周溝墓1基と、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の溝1条**が調査されました。その後の**第5次調査**では、中近世の**溝1条と時期不明の土坑1基**が見つかります。

1992年には、**第1次調査区**の西側隣接地で**第6次調査**が、1993年には**第7次調査**が実施されました。特に、**第6次調査**では、弥生時代中期の**方形周溝墓3基と周溝状の遺構、平安時代の溝1条**が見つかりました。**第7次調査**でも、弥生時代中期の**方形周溝墓5基と、方形周溝墓の可能性**がある溝2条が見つかっています。**第7次調査**では、多くの**方形周溝墓から大きな壺形土器**が出土しました。

仮家塚遺跡で、これまで検出された**8基の方形周溝墓**はすべて**弥生時代中期**の特徴である四隅が切れた平面形をしています。また、**出土した土器もすべて宮ノ台式土器**（みやのだいしつどき）と言われる土器で（**第3章参照**）、**房総地域の宮ノ台式最古段階に位置づけられる資料**と評価されています。

（白石哲也）

## 2

## 農耕集落——その誕生と社会変動

稲作を中心とした本格的な農耕がはじまると人はそのまわりに住むようになる。農耕社会の発展から政治的社会的誕生まで

## ① 稲作のはじまり

——紀元前2世紀～紀元前1世紀頃（弥生時代中期後葉）

狩猟、採集、漁撈により生計を立てていた縄文人は、そうした活動に適した海や河川、森に近い環境で暮らしていました。しかし、弥生時代に稲作を中心とする本格的な農耕がはじまると、人びとは河川から低地に灌漑用水を引いて水田を開墾し、その周辺に居住地を構えるようになります。それは、現代の農村の原点といえる「農耕集落」が誕生した瞬間でした。

関東地方では、日本列島で最初に農耕社会が成立した九州北部の玄界灘周辺から遅れること約600年、紀元前4～前3世紀こ

ろから神奈川県中里遺跡や埼玉県池上・小敷田遺跡に本格的な農耕集落が出現します。房総半島でも、小糸川下流域の君津市常代遺跡で同じ頃に農耕集落が成立したと考えられますが、南房総ではこの時期にさかのぼる農耕集落の証拠は見つかっていません。

南房総で最古の農耕集落に関する証拠は、館山湾に注ぐ平久里川の左岸、現在の南房総市府中の低台地上に立地する仮家塚遺跡で見つかりました。この遺跡では、宅地造成に際して行われた発掘調査で、四隅が切れた溝で囲まれた方形周溝墓と呼ばれるお墓が発見されたことから（第6章「墓」参照）、館山平野でもこの頃から水田を作る人びとが暮らしていたことがわかりました。一方で、これまでお墓に葬られたと思われる人びとが暮らした竪穴住居の確実な証拠は見つかっていません（第5章「住居」参照）。仮家塚遺跡で暮らした人びとは、この頃、南関東で広く使われた宮ノ台式と呼ばれる土器を使っていました（第3章「土器」参照）。この土器を使う人びとはその後、平久里川の南側を流れる滝川流域に居住域を移したと考えられ、滝川の北側に所在する宇

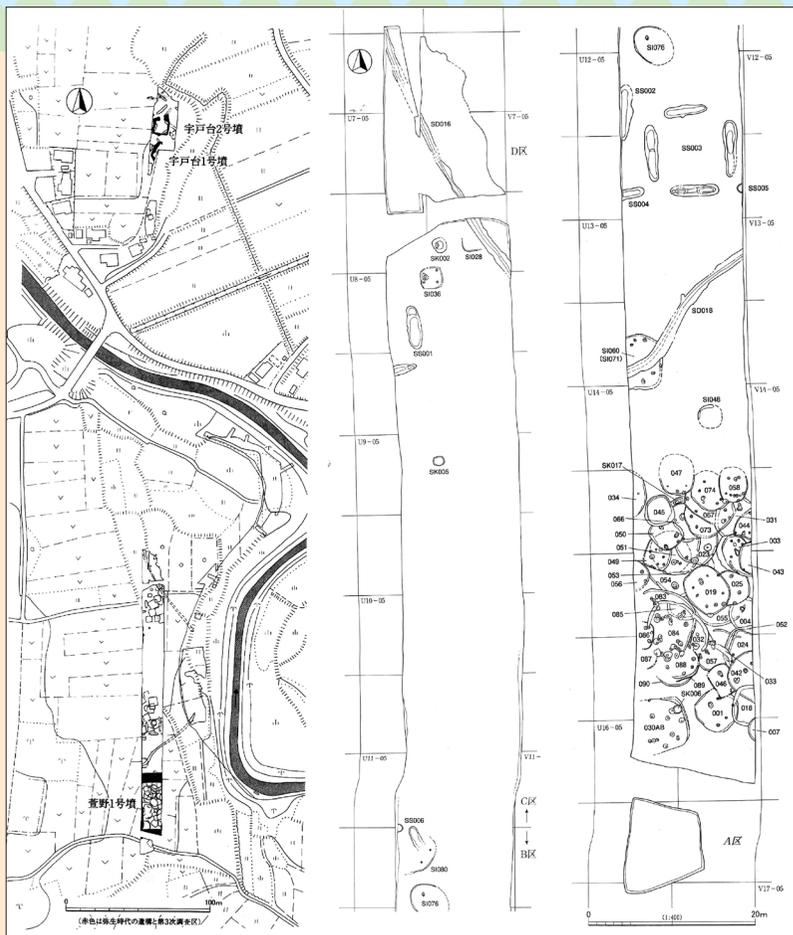


図1 宇戸台遺跡・萱野遺跡。滝川の北側には宇戸台遺跡、南側には萱野遺跡が広がる。右側トレンチは弥生時代の萱野遺跡（白井ほか2010）。



写真1 萱野遺跡全景（南から）。写真中央を斜めに走る溝が環濠。多数の竪穴住居跡が切り合う（写真は図1の右側トレンチに対応）（白井ほか2010）。

戸台遺跡では仮家塚遺跡とよく似た方形周溝墓が見つかっています。また、現在の安房地域医療センターの北側で行われた萱野遺跡の発掘調査では、断面V字状の溝で環濠に取り囲む「環濠」と、その内外に多数の竪穴住居や方形周溝墓が計画的に配置される形態の集落が見つかりました【図1・写真1】。これは、本格的な農耕社会が始まった地域で一般的にみられる集落の姿であることから、紀元前2〜前1世紀頃には、館山平野でもそうした集約的

な水田経営がはじまったことが明らかになりました。萱野遺跡では、新しい時期の遺構に壊されているため確実なことは言えませんが、弥生中期の竪穴住居跡が10軒以上見つかっていることから、本来はもっと多くの住居が建てられ、周辺には滝川を用水とする水田も開かれていたと推測されます。この集落は、次の弥生後期にも引き続き館山平野の拠点集落として繁栄しました。

県道館山白浜線を建設する際に調査された館山市の長須賀条

里制遺跡では、汐入川右岸に広がる沖積低地上から古代の水田が検出されました【写真2】。その主な時期は古墳時代から平安時代のものですが、遺跡からは宮ノ台式土器や弥生時代の木製品も出土しており、弥生時代にも水田として利用されていた可能性があります。この場所は、地震により地面が隆起した沼面群と呼ばれる南房総特有の地形付近に立地しており、海側から数えて3列目の沼川面の陸地側に位置しています。しかし、この水田は萱野遺跡からは距離がありすぎることから、おそらくより近い場所の



写真2 長須賀条里制遺跡B区水田跡。畔と畦畔の跡がみえる（高梨2006a）。



写真3 根方上ノ芝条里制C地区全景。現在は水田が広がる低地面に竪穴住居跡を中心とする農耕集落が形成された（千葉県史料研究財団2003）。

最奥部まで土地利用されたことがわかっていきます。館山平野以外の地域では、鴨川市域の長狭平野に所在する根方上ノ芝条里跡―地点などで弥生中期の終わりごろの竪穴住居跡が数軒見つかっており、規模の小さな集落が点在していました。しかし、この時期の遺跡の数はわずかで、農耕社会の本格的な形成は次の時期を待たなければなりませんでした。

集落に住む人びとにより開かれたものと思われれます。長須賀条里制遺跡から南に200メートルに位置する東田遺跡は、その候補です。このように、弥生時代中期後葉の遺跡は基本的に水田経営が可能な館山平野沖積地を中心に展開していましたが、館山平野周辺の丘陵上でもこの時期の土器や石器が見つかっており、こうした場所ではおそらく木材の伐採などが行われた可能性があります。さらに、館山平野南部の最奥部、汐入川支流の河岸段丘高位面からもこの時期に使用された大型の土坑（掘り込み）が見つかっており、平野

## ② 農耕社会の発展

——紀元1世紀～3世紀前半頃（弥生時代後期～終末期）

### 9 館山平野の様相

弥生中期から後期への変化は、宮ノ台式土器から久ヶ原式土器への変化を基準としますが、久ヶ原式土器は宮ノ台式土器の要素を多く受け継いでおり、土器の作り手集団が変わったわけではないようです（第3章「土器」参照）。しかし、中期から後期に変わるこの時期は、全国的に遺跡の数が大きく減り、人口減少や社会の流動化が起こったと考えられています。

萱野遺跡では、調査されたのは遺跡の一部にすぎませんが、それでも弥生後期の竪穴住居跡が40軒ほど見つかっています。弥生後期のはじめ頃に位置づけられる土器が竪穴住居跡の中から出土し、また中期に掘られた環濠の中にも後期の土器がたくさん捨てられていたので、中期から継続して人が暮らしていたと思われまます。萱野遺跡では弥生時代の終わりまで、新しい住居が古い時期の住居を壊して繰り返し建てられているため、集落の全体像を復元することは難しいものの、館山平野の拠点的な集落として長期間継続していたことは確実です。

弥生後期の南関東では、大小の集落や墓域が多様な立地に広く分布するようになることが大きな特徴で、館山平野でも同じ状況がみられます。平久里川流域の仮家塚遺跡や宝珠院遺跡では小型の竪穴住居跡がわずかに点在する一方、萱野遺跡の滝川対岸に所在する腰越遺跡では、後期でも古い時期の方形周溝墓が発見され、

墓域として利用されました（第6章「墓」図2・写真2参照）。また、安房国分寺遺跡では合口壺棺の墓などが出土しており、弥生後期を通じて長期にわたる土地利用が行われていました（第6章「墓」写真1参照）。奈良時代の国分寺建立などによる破壊を受けていることを踏まえると、実際にはかなりの規模の集落が存在していた可能性があります。

館山平野南部の東田遺跡では、調査区から弥生後期に属する竪穴住居跡と方形周溝墓に加え、大型土坑や複数の溝が発見されました。汐入川の段丘面に面しており、遺跡の一部は崖から崩落してしまっています。出土した土器は後期前半のものもありますが、中心となるのは後期後半の時期で、遺跡の規模は萱野遺跡に比べると小さいと推定されるものの、やはり長期間にわたり利用されたことがうかがえます。

館山平野の後背湿地に立地する長須賀条里制遺跡では、旧河道や基盤層から弥生後期の土器片が出土しています。これらは宮ノ台式土器と一緒に出土していることから、中期から引き続きこの地区が水田として利用された可能性を示しています。

### 9 農耕集団の多様な立地への進出

鋸山と浦賀水道を臨む鋸南町の佐久間川流域には、戦後間もない時期に弥生後期の竪穴住居跡2軒を発掘調査したことで有名な田子台遺跡があります。竪穴住居の跡からは、久ヶ原式土器のほか、シイの実、大量のガラス小玉、青銅製品、石皿、石斧、紡錘車形の軽石などが出土しました。この調査から、この時期には

標高80メートルの高位台面まで集落が進出していたことがわかりました。

弥生中期の終わり頃から農耕集落が形成されはじめた鴨川市の長狭平野では、弥生後期になると集落の数が飛躍的に増加します。特に待崎川東岸の河岸段丘上に集落が広く展開し、根方上ノ芝条里跡C地点では、弥生後期の竪穴住居跡74軒が発見され、古墳時代まで

継続する拠点集落を形成しました【写真3】。遺跡東側の谷からは3時期にまたがる水田跡が検出され、最古段階の水田は弥生後期にさかのぼる可能性があります。

C地点から南側の河岸段丘上に立地するE地点では、弥生後期の竪穴住居跡26軒が発見されました(第6章「墓」写真4参照)。

また、E地点から南東約100メートルの微高地上に立地するF地点では、調査区北東側で北から南に蛇行する旧河道が見つかり、旧河道内からは弥生後期の溝2条、河道南側からは弥生後期の竪穴住居跡21軒が見つかりました。時期は出土した土器から後期後半が主体で、さまざまな種類の石器や鹿角も出土しています。他にも、F地点東側のG地点の竪穴住居跡4軒を含めると、E・F・G地点はいずれも標高約13メートルに位置する半径150メートル程の範囲に収まることから、これらの遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて深いつながりを持っていた集落群と考えられます。同じ待崎川流域でも、先ほど紹介した弥生中期の集落の1地点や、北側の高位面に位置し、弥生時代後期初頭からは

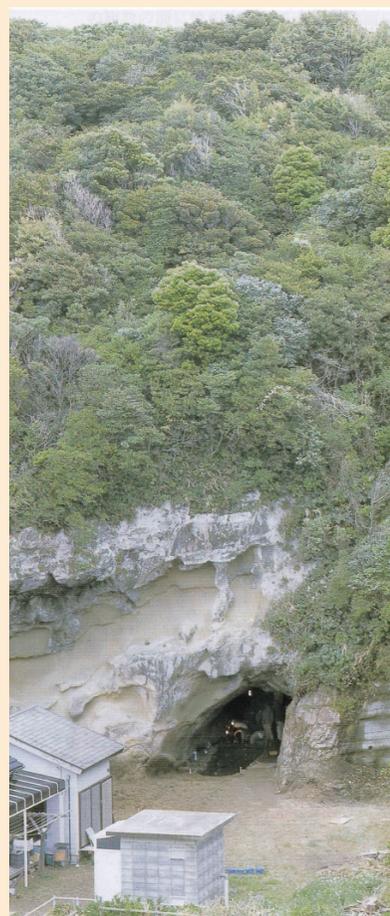


写真4 こうもり穴洞穴全景(右)とこうもり穴遺跡出土ト骨(左)(千葉県史料研究財団2003)

じまる長期継続型集落のC地点とは異なる集落のなりたちがかがえます。弥生時代の長狭平野では、待崎川が丘陵裾部から南流し東向きを変える約1.5キロメートルの範囲を中心に開発が進められたと推定されます。

このように、弥生後期から古墳前期にかけては、年代ごとにあがる程度のまとまりを維持しながら、生活域、墓域、生産域として河岸段丘上の複数の空間を弥生後期前半から選地し、竪穴住居で構成される集落が散在して展開していたようです。

こうした様相は、外房地域では長狭平野につぐ面積の沖積平野を有する千倉地区でもみられます。千倉地区では、今のところ弥

生中期にさかのぼる時期の遺跡は見つかっていませんが、弥生後期になると、長狭平野と同様に後背湿地に面する微高地上に集落が形成されるようになります。特に、瀬戸川河岸段丘上の薬師前堀ノ内遺跡や瀬戸遺跡、海岸から並列する砂丘列上に弥生遺跡が分布しています。

薬師前堀ノ内遺跡では、第2次調査で後期前半から終末期にわたる時期の竪穴住居跡13軒が発見されました。その北西側では方形周溝墓の一部が見つかっていることから、居住域は第2次調査区とその南側に、墓域は調査区の北側に広がっていたようです（第6章「墓」写真3参照）。瀬戸川支流段丘上に立地する稲子沢地点では、柱穴や炉といった施設を伴わない弥生時代後期の竪穴状遺構3基と、土器、勾玉、管玉、ガラス小玉が出土したコの字型の方形周溝墓が見つかりました。竪穴状遺構の性格は不明ですが、軟弱な地質の砂丘列上に構築されていることから、なにかの作業場として利用された可能性があります。

また、弥生時代終末期には、勝浦市の守谷湾に面したこうもり穴洞穴で古い用のト骨が大量に出土しており、海に面した洞穴内での人間活動の痕跡が認められます【写真4】。

### 3 政治的社会的誕生

——紀元3世紀前半（弥生時代終末期）

弥生時代の関東地方では、集落ごとにムラを治めるリーダーはいたものの、広域的に地域社会を統合し、支配する政治権力は

まだ現れていなかったと考えられています。しかし、弥生時代終末期と呼ばれる紀元2世紀の終わりから紀元3世紀の前半になると、後のヤマト王権につながる奈良盆地や、濃尾平野（岐阜・愛知・三重にかけて広がる平野）といった先進地域の影響を受け、出現期古墳と呼ばれる墳丘墓が房総半島にも築造されるようになります。代表的な墳丘墓としては、木更津市の高部30・32号墳や、市原市の神門墳丘墓群があり、それとともに北陸地方や東海地方西部に由来をもつ外来系土器も多く出土するようになります。これらの現象は、魏志倭人伝に記述された邪馬台国の成立に関わる列島規模で展開する社会変動が、この地域にも大きく波及してきたことを示すものと考えられます。

安房地方でも、これまでの方形周溝墓に代わり、一定規模の墳丘墓が築造されるようになります。萱野遺跡では、弥生後期の集落を破壊する形で萱野1号墳が築造され、近隣の宇戸台遺跡でも宇戸台1・2号墳が築造されました。長狭平野では、根方上ノ芝条里跡E地点でこの時期の墳丘墓の周溝が見つかっており、萱野遺跡と同じように弥生後期の集落が墓域に変化した様子が見取れます。その一方、土器などには安房地方の伝統を残すものが使われ続けます（第6章「墓」写真4参照）。根方上ノ芝条里制C地点で弥生時代後期から古墳時代前期に集落が継続的に営まれていたことを考えても、古墳文化は弥生時代以来の在地集団が主体となって受容したと考えた方がよさそうです。

（杉山祐一）

# 土器——稲作農耕社会を物語る宮ノ台式土器

稲作農耕の始まった時代の土器からは何がわかるか  
 仮家塚遺跡出土の弥生土器には  
 どんな特徴があつて何がわかるのだろう

\* \* \*

仮家塚遺跡の方形周溝墓から出土している土器【図1】は、「宮ノ台式土器」と呼ばれており、その名前は時代・時期とその分布範囲を示しています。もう少し詳しく言えば、出土した土器は弥生時代中期後葉（弥生時代中期を前葉・中葉・後葉の三つに分ける場合、その最後の小期）の南関東地方の文化に属しており、しかもその初期に位置づけられるのです。

ここでは、弥生土器とは何か、宮ノ台式土器がどのような土器なのか、仮家塚遺跡の宮ノ台式土器にどのような意義があるのかについてまとめてみることにします。

## ① 弥生土器とは

弥生時代は日本列島において稲作農耕の始まった時代で、弥生時代の文化を弥生文化と呼んでいます。そこで使われたのが弥生土器です。とはいえ、弥生時代の性格は、考古学研究の発達につれて、徐々に解明されてきたものなのです。そもそも弥生時代の名前の元は、東京大学とその近傍の向ヶ丘弥生町であり、そこで1884年に発見された1点の土器を「弥生式土器」と呼ぶようになったのが始まりです。その後、同種の土器の詳細な観察が行われ、縄文時代の土器と古墳時代の土器との中間的な特色を持つこともわかってきて、「中間土器」などとも呼ばれていました。

九州地方から東北地方北部まで、各地で発見される弥生土器がすべて同じ形や文様をもっているものではありません。地域の中で生産されたものがその地域内に分布するのが基本で、それゆえにそれぞれの地域の土器に名前がついています。

また、最初に発見された弥生町の土器をはじめとして、東日本

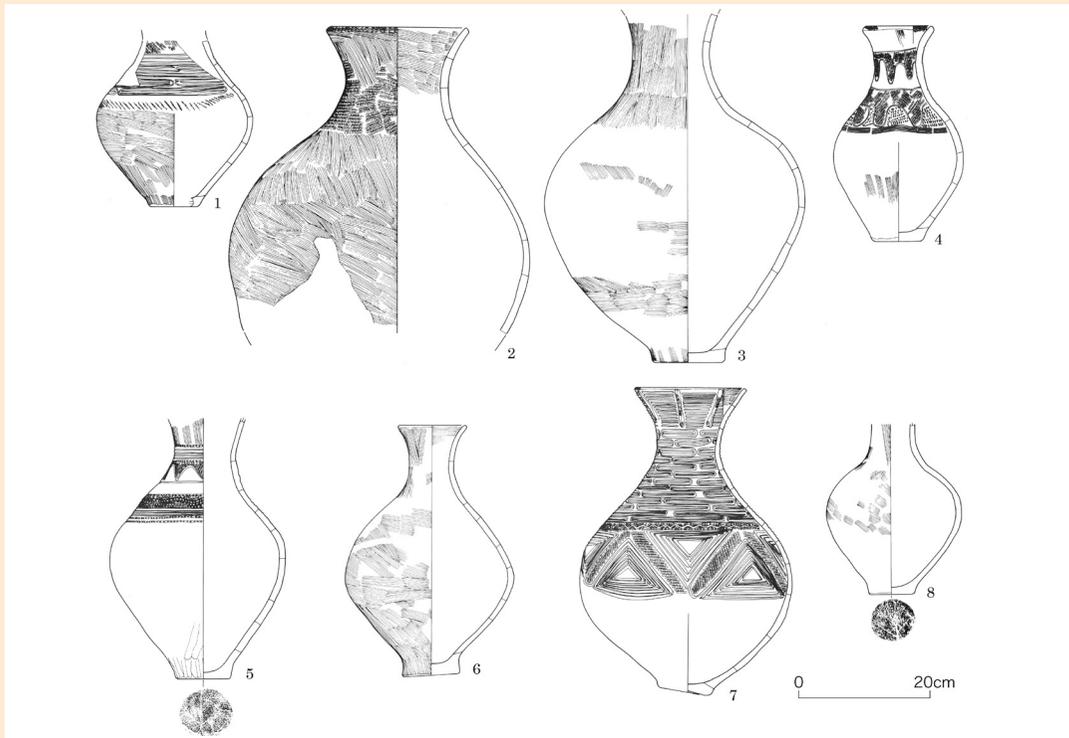


図1 仮家塚遺跡の弥生土器（大淵・小川1994より作成）。仮家塚遺跡の方形周溝墓からは多数の壺形土器が出土している。これらの中には弥生時代中期中葉の様式構成を脱しきっていないものもあり、房総半島最古級の古い宮ノ台式土器と考えられている。

の弥生土器には文様として縄文じょうもんが付付けられているものがあり、大きな特徴となっています。これに対して九州地方や近畿地方の弥生土器には縄文はみられず、ほとんど無文むぶんのものも多いのです。古墳時代の土器には縄文は付けられません。

弥生土器からわかることは、こうした年代と地域の情報だけではありません。遺跡からは時に他の地域からもたらされた土器が出土します。それは広い範囲の土器の同時性を物語ることはもちろん、当時の人びとが交流した証あかしにもなるのです。遠くから持ち込まれた土器には、何が入っていたのでしょうか。想像もふくらみます。

弥生土器のうち甕形土器かめがたどきには火にかけた痕跡こんせきが残っていることから、煮炊きに使ったものであることがわかります。壺形土器つぼがたどきや高坏形土器たかづまがたどきには通常火を受けた痕跡が残されないで、弥生土器には機能に応じた作り分けがなされていたことも明らかです。これらは東アジアの農耕民の使う土器のセットなのであり、日本列島各地の弥生文化の中で広く認められる共通性でもあるのです。

## ② 宮ノ台式土器の発見

仮家塚遺跡からも出土している宮ノ台式土器は、現在の神奈川県・東京都・千葉県を中心に分布する南関東地方の弥生土器です。東海地方の同時期の土器と形や作り

方に共通点も多く、直接・間接の影響を受けているものと考えられています。

宮ノ台式土器の名前の元となったのは、千葉県茂原市綱島に所在する宮ノ台遺跡で、昭和初期の調査・研究に起源があります（杉原1935）。こうした遺跡を「標式遺跡」と呼んでいます。宮ノ台式土器は千葉県域でも大崎台遺跡（柿沼ほか1985・86・87、柿沼・高橋1997）をはじめとする多くの遺跡から豊富な資料が出土しており、壺形土器・甕形土器を中心として、少量の高坏形土器や鉢形土器が伴っていることがわかっています。考古学では竪穴住居跡などから一緒に出土する土器をとりまとめ、時期を同じくすると考えられる土器のセットを「型式」という用語でまとめており、宮ノ台式土器という型式名称は南関東地方の弥生時代中期後葉を示す用語にもなっています。

宮ノ台式土器に先行する南関東地方の弥生時代中期中葉の土器は中里式と呼ばれており、神奈川県小田原市にある遺跡の名称が標式になっています。宮ノ台式土器に後続する弥生時代後期の土器は久ヶ原式土器と呼ばれ、東京都大田区にある遺跡を標式としています。

このように、南関東地方各地の遺跡名が土器型式の名称になっていますが、土器は標式遺跡において専門的に作っているわけではありません。宮ノ台式土器も、人びとの生活領域に近い比較的小さい範囲で作られ、使われるのが基本であるようです。そのため、同じ宮ノ台式土器とされるものにも、東京湾の西岸域と東岸域とでは文様などの面でそれぞれ地域色をもって分布していますし、

その地域性はこれからもさらに細分されていくはずなのです。

### ③ 宮ノ台式土器の時期細分と位置づけ

1970年代以降、大規模な発掘調査の機会が増えて多くの調査が行われるようになりました。弥生時代の遺跡も例外ではなく、数万平方メートルの規模を持つ集落遺跡や、その墓域である方形周溝墓の遺跡も多く知られるようになってきました。実は宮ノ台式土器の時期は、本格的な農耕集落が関東地方の広い範囲で登場した大きな画期だったのです。

特に、神奈川県横浜市域の港北ニュータウン遺跡群の発掘調査によつて鶴見川・早淵川流域に多数の宮ノ台式期の遺跡が発見されたことは、この時期の研究に大きな影響を与えました。大塚遺跡（武井編1991・岡本ほか1994）をはじめとして、規模の異なる集落遺跡が群をなして広がっている状況を整理して、宮ノ台式土器を用いた時間軸が策定され（安藤1990）、それをもとに弥生社会の内実を分析する試みが行われたのです（安藤1991）。

現在、宮ノ台式土器は壺形土器や甕形土器の器面の整形・調整技法（器の形を仕上げる方法）や器面に施される文様の観察をもとに5期程度に細分されています。

やや専門的になりますが、土器を作る際に表面に残される痕跡や文様について記しておきましょう【図2】。

土器の表面は木製のへらの小口面をあてて整形されるものが多く、これを「刷目目」と呼んでいます。この整形痕は壺形土器や

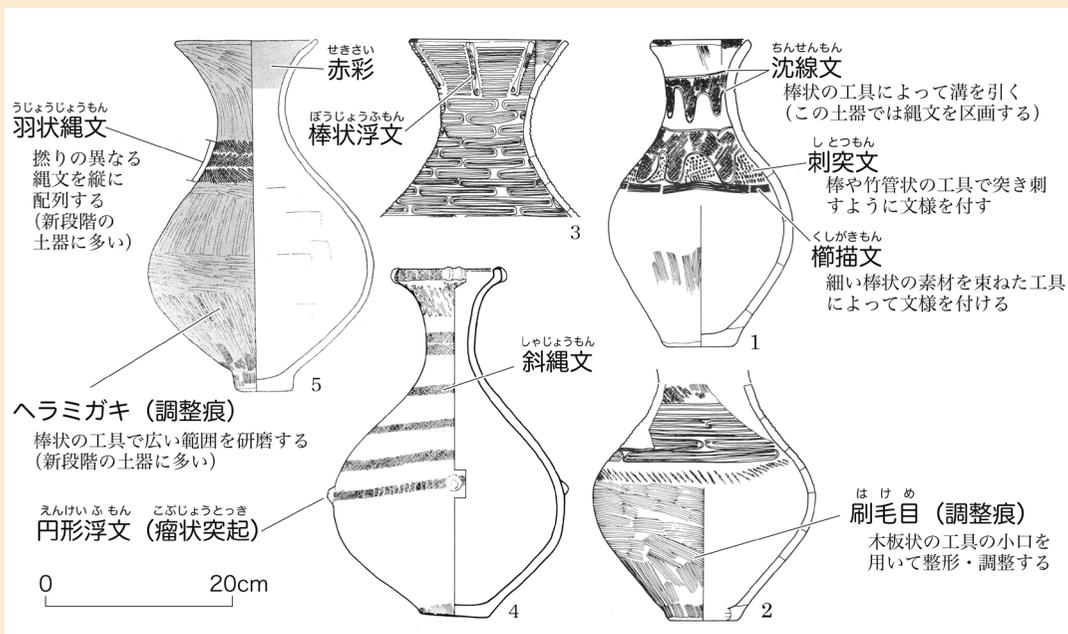


図2 宮ノ台式土器の整形・調整技法と文様。宮ノ台式土器の壺形土器には縄文、沈線文、櫛描文などによってさまざまなモチーフの文様を施す。器の表面には工具による整形・調整痕が残るが、古いものには刷毛目調整痕が目立ち、新しくなるにつれて全面をへらミガキ調整で仕上げるものが増えていく（図示した土器は1-3: 仮家塚遺跡出土（大淵・小川 1994 年より）、4: 大塚遺跡出土（岡本ほか 1994 年より）、5: 折本西原遺跡出土（石井 1980 年より））。

壺形土器によく残されています。このほかにへらや指でなでるものもみられます。新しい時期になると、やや乾いた器面を工具で研磨する「へらミガキ」という技法が多く使われるようになります。これによって刷毛目の痕跡を消し去るものが増えるのです。

壺形土器の文様には沈線文（棒状の工具で溝を引いてつける文様）、刺突文（同様の工具で器面を突き刺してつける文様）、櫛描文（数本の細い棒を櫛のように束ねた工具によってつける平行線状の文様）、斜縄文（一般的な縄文）、浮文（棒状や円形の粘土を貼り付けてつける文様）などがあり、赤く塗彩した例（彩文の一種）もみられます。これらのうち宮ノ台式土器以前の土器から認められるのは沈線文や刺突文、斜縄文で、やや太めの沈線によってさまざまなモチーフの区画文様を描き、区画の内側を刺突文や沈線文で埋める（充填する）ものが多くみられます。仮家塚遺跡の出土土器にも、こうした古い文様に近いものがみられます。

宮ノ台式土器には東海地方で例の多い櫛描文が新たに加わり、横方向に広がる帯状の文様が増加して、前代のさまざまな文様モチーフが整理されて次第にシンプルな構成に近づいていくかのようにもみえます。また、新しい時期には羽状縄文（撚りの方向の異なる縄文をあわせて、鳥の羽根のようにみえる文様）の割合が増え、斜縄文から置き換わっていきます。赤く塗彩した土器も増え

る傾向にあります。

こうした土器の器面の整え方や文様のつけかたが次第に変化していく様子については、竪穴住居跡などからまとまって発見される土器群を比較し、その関係性を整理することによって理解することができるとは、

#### 4 仮家塚遺跡の宮ノ台式土器

仮家塚遺跡の本格的な発掘調査が行われ、方形周溝墓と出土土器についてのまとまった調査報告書が刊行されたとき、弥生土器の研究者たちは少なからぬ衝撃を受けました。壺形土器の形は宮ノ台式土器そのものなのですが、文様には弥生時代中期中葉の土器に似ている部分が多かったためです。すなわち、沈線による区画文様の内部を沈線文や刺突文で充填したり、宮ノ台式土器に特徴的な櫛描文が比較的少なかったりしたこと、典型的な宮ノ台式土器に先行するものだと考えられたのです。これはそれまでの千葉県域で調査・発見された土器にはみられなかった特徴で、仮家塚遺跡の土器が房総半島最古の宮ノ台式土器だとする根拠がここにあるのです。ただし、これまでに調査された仮家塚遺跡の方形周溝墓がすべて同時に営まれたものであるとは限らず、ある程度の時間幅を持っている可能性も考えられます。

こうした特徴を有する南関東地方の土器は少ないのですが、類似した例として神奈川県小田原市の久野多古境遺跡出土土器（田村ほか2021）【図3】が挙げられます。仮家塚遺跡と同様に方形周

溝墓群から出土した壺形土器を中心とする土器群で、これに先行する中期中葉の中里式土器と共通する要素を持ちながら、基本的には宮ノ台式土器の特徴を備えています。両遺跡の出土土器は宮ノ台式土器の中でも最古の部類に入るものと考えられることができるでしょう。

\* \* \*

仮家塚遺跡の土器は南関東地方で本格的な稲作農耕が広い範囲で行われるようになる時期のはじまりを物語る土器です。仮家塚遺跡を残した人びとは、安房あわ地方で稲作を始める先駆けとなったものとみられますが、仮家塚遺跡出土の弥生土器の意義はそれだけではありません。宮ノ台式土器を使った人びとが南関東地方にどのように広がっていったのか、そして他の地方の人びととどのような関係をもっていたのかを明らかにし、東日本の中で稲作農耕社会がどのような展開をみせるのかを考えるために欠かせない資料だといえるのです。

（小倉淳一）

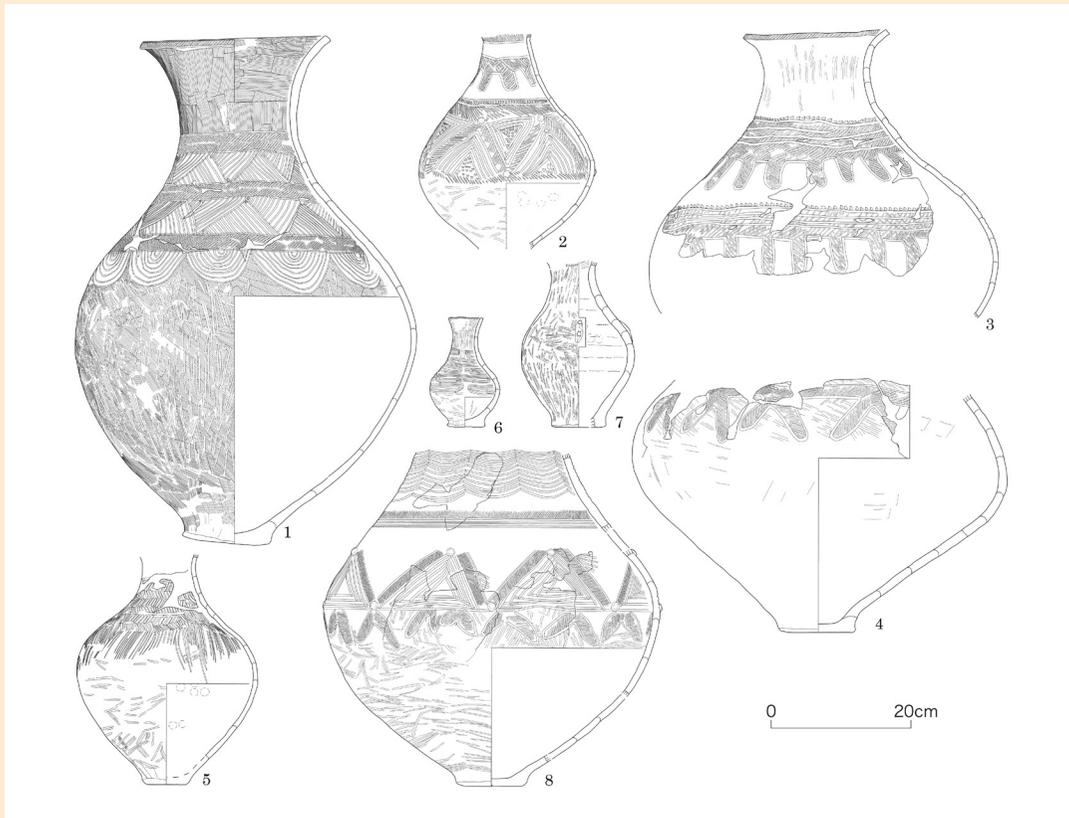


図3 久野多古境遺跡第Ⅴ地点1号方形周溝墓出土土器（田村ほか2021より作成）。仮家塚遺跡の壺形土器よりも大形のもが目立つ。縄文によって描かれるモチーフも多彩で、文様構成の上では東海地方の影響を受けているが、櫛描文を持たない個体も多い。

# 地理と考古学調査

——南房総の歴史はどう解明されてきたか

現在の館山市、鴨川市、南房総市、安房郡鋸南町、勝浦市や上総地域の一部も含めた南房総——

この地域の考古学調査は明治時代から行われてきた

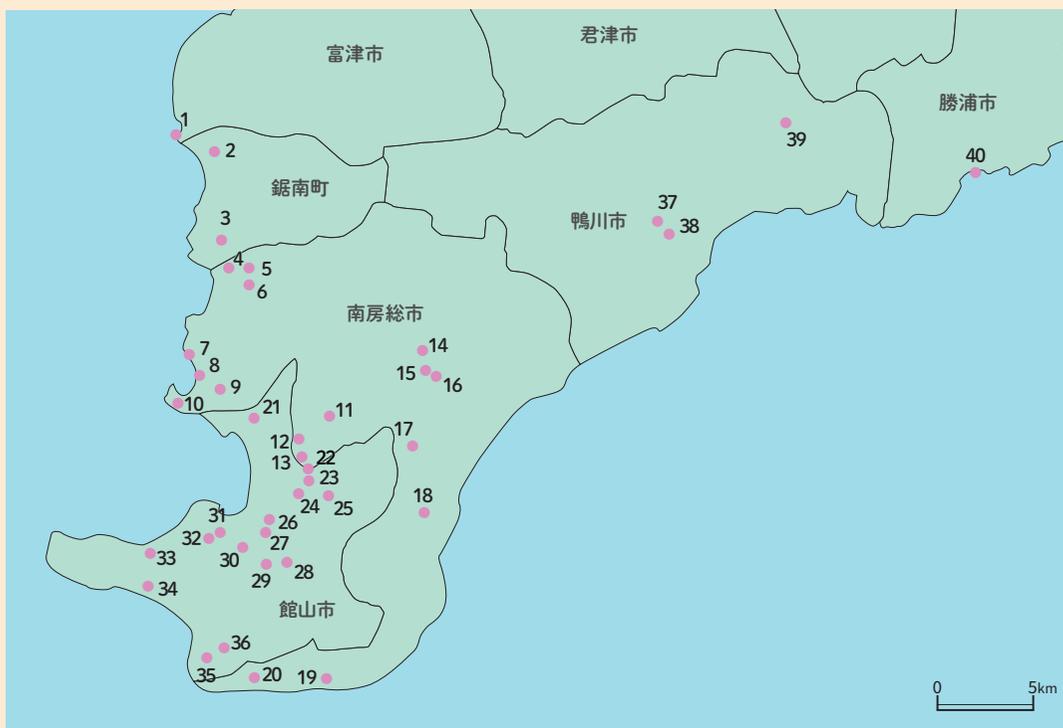
## ① 南房総の地理的特徴

房総半島の南端部にあたる南房総の地域は、古代律令制以降江戸時代までの安房国の範囲がほぼ相当します。旧安房国の範囲は現在の館山市、鴨川市、南房総市、安房郡鋸南町の3市1町が該当し、安房地域や安房郡市地域とも言います。ここでは勝浦市など上総地域の一部も含めて、大まかに南房総として進めます。房総半島の南半分は房総丘陵と呼ばれる丘陵地形が広がり、鋸山や愛宕山などを含む東西に延びる清澄山系を境として、北側が上総地域（旧上総国）、南側が安房地域（旧安房国）になります。現在の南房総の地形は、房総丘陵から派生する丘陵が海岸近くま

で迫っていて、比較的広い平地は館山平野と長狭平野があります。が、全体的には山がちな地形です。

南房総地域は大きな地震のたびに隆起を繰り返していて、特に南部ほど隆起が顕著であることが知られています。大正12年の関東大地震では最大2メートル（館山市布良など）も隆起しました。また地理学の研究成果から、南房総南部では縄文時代前期（約6000年前）以降に限っても少なくとも4回は大きく隆起していて、海岸線の位置は時代を追って変化していると考えられます。

このように地震による隆起地形という特徴がある南房総では、縄文時代の小規模な貝塚が標高20〜40mの位置で発見されていることや、海蝕洞窟遺跡が標高20〜30mに存在することなど、遺跡分布にも特徴がみられます。このような遺跡が発見され易かったこともあり、考古学研究の対象として貝塚や洞窟遺跡の調査が多く行われてきました。



|                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1 明鐘崎洞窟遺跡（富津市金谷・鋸南町元名） | 21 稲原貝塚（館山市小原）      |
| 2 下ノ坊遺跡（鋸南町保田）         | 22 宇土台遺跡（館山市腰越）     |
| 3 田子台遺跡（鋸南町下佐久間）       | 23 萱野遺跡（館山市山本・国分）   |
| 4 恩田原遺跡（南房総市久枝）        | 24 安房国分寺跡（館山市国分）    |
| 5 要害山城跡（南房総市二部）        | 25 稲村城跡（館山市稲）       |
| 6 大峰畑遺跡（南房総市高崎）        | 26 長須賀条里制遺跡（館山市下真倉） |
| 7 岡町遺跡（南房総市富浦町南無谷）     | 27 東田遺跡（館山市上真倉）     |
| 8 岡本城跡（南房総市富浦町豊岡）      | 28 谷遺跡（館山市東長田）      |
| 9 深名瀬畠遺跡（南房総市富浦町深名）    | 29 出野尾洞窟遺跡（館山市出野尾）  |
| 10 大房岬遺跡（南房総市富浦町多田良）   | 30 つとるば遺跡（館山市沼）     |
| 11 谷向貝塚（南房総市谷向）        | 31 大寺山洞窟遺跡（館山市沼）    |
| 12 仮家塚遺跡（南房総市府中）       | 32 赤山遺跡（館山市沼）       |
| 13 宝珠院遺跡（南房総市府中）       | 33 鉦切洞窟遺跡（館山市浜田）    |
| 14 宮下東畑遺跡（南房総市宮下）      | 34 翁作古墳（館山市坂井）      |
| 15 永野台遺跡（南房総市石堂）       | 35 安房神社洞窟遺跡（館山市大神宮） |
| 16 石堂下栗野台遺跡（南房総市石堂）    | 36 大塚貝塚（館山市大神宮）     |
| 17 加茂遺跡（南房総市加茂）        | 37 東条地区遺跡群（鴨川市和泉ほか） |
| 18 健田遺跡群（南房総市千倉町瀬戸ほか）  | 38 後広場古墳群（鴨川市広場）    |
| 19 小滝涼源寺遺跡（南房総市白浜町白浜）  | 39 清澄山麓古墳（鴨川市清澄）    |
| 20 見上遺跡（南房総市白浜町滝口）     | 40 守谷湾洞窟遺跡群（勝浦市守谷）  |

図1 遺跡の位置

## ② 南房総の考古学調査の歴史

南房総における遺跡の発見や考古学調査の主な履歴を、安房地域の出来事とともに後掲の年表に挙げました。またそれらの遺跡の位置を、図1に示しました。なお本章で取り上げた遺跡や関連する遺跡のみであり、実際にはもっと多くの遺跡があり、この他にも発掘調査が行われています。

考古学的発見や発掘調査の目的、調査内容や体制については、時代背景と共に時期によって特徴が見られます。明治時代から令和時代初頭までの、南房総における考古学調査・研究の変遷を、大きく四期に分けて見ていきます。时期的な概要とともに、主な発見や調査の事例を取り上げます。

### 9 第一期…明治時代から昭和時代初期（太平洋戦争まで）

日本考古学の黎明期であり、南房総においても、遺跡が発見されはじめ考古学の対象になり始めた時期です。この時期の考古学調査は、大学などの研究者が短期間で実施しています。

最初の考古学調査の記録は、明治32年の館山市東長田の谷遺跡の発見と調査があげられます。土器などが多数出土することを発見した住民からの通報および鑑定依頼を受けた東京帝国大学（現在の東京大学）の坪井正五郎氏から嘱託されて、大野延太郎氏が現地に着いて調査しました。遺跡の概要と遺物の特徴を図示して学会誌に報告しています。我が国で、祭祀遺跡が学会報告された最初の事例です【図2】。

南房総に多い

洞窟遺跡は、大

正関東地震（関

東大震災）直後

から発見と調査

が始まりました。

端緒となつ

たのは、江上波

夫氏（当時旧制

浦和高校生）が

大正13年に勝浦

市の守谷洞窟遺

跡およびその周

辺の洞窟遺跡を

発見したことで

す。この報告を

承けて東京帝国大

学の研究者らが

守谷谷の洞窟遺

跡を調査してい

ます。少し遅れて

安房地域では、

昭和7年に安房

神社洞窟遺跡（

館山市大神宮）

が発見され、調

査されたのが最

初です。発見直

後に、安房神社

から要請を受けた

大場磐雄氏によ

って発掘調査が

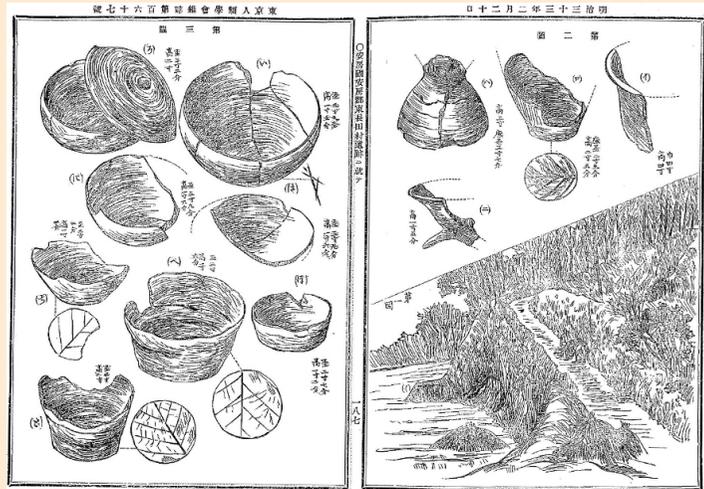


図2 大野延太郎の調査報告（部分）（大野1900より）

安房神社から要請を受けた大場磐雄氏によって発掘調査が行われ、人骨が出土しました。

昭和10年代は、戦時体制へ向かうに従い首都防衛の前面にあたる房総半島地域は、軍関係施設が多いため自由に調査を行うことが出来ない状況になり、考古学調査の空白期間となっています。

## 9 第二期…戦後の昭和20年代から30年代初頭

戦後になり、改めて歴史に関心が向けられるようになり、考古学調査も数多く行われています。この時期の調査は、大学の研究者による発掘調査ばかりではなく、地元の研究者や高校生が主体



写真1 田子台遺跡（鋸南町）（筆者撮影）

の調査も行われ、また多くの発掘調査に地元高校生が参加しています。そのほかに市町村や教育委員会が地域の歴史を解明する目的で企画した調査も行われています。考古学に対する期待や、文化財保護の機運が盛り上がった時期です。

昭和23年に南房総市加茂（旧丸山町）の加茂遺跡が、慶応義塾大学考古学研究室によって発掘調査されました。この調査では、考古学だけでなく自然科学分野の研究者の協力を得て、自然科学分析も掲載した報告書が作成され、総合的調査報告の先駆的な内容となっています。

昭和23年から26年には縄文時代の遺跡（貝塚）の調査がいくつも行われています。

南房総市谷向（旧三芳村）の谷向貝塚が、昭和23年と25年に発掘調査されています。同25年には、館山市小原の稲原貝塚が発掘調査されました。稲原貝塚は安房高校郷土史研究部の生徒によって発見され、25年3月と同年4月に発掘調査されています。4月の調査には、安房第一高校（現在の安房高校。昭和25〜35年度の間の名称）教員の君塚文雄氏および有志生徒が参加しています。翌26年には、安房第一高校郷土史研究部生徒によって、館山市大神宮の大塚貝塚の調査が行われています。

昭和27年、鋸南町下佐久間（当時は勝山町）の田子台遺跡の発掘調査が、勝山町が主催、千葉県教育委員会の後援で計画され、早稲田大学考古学研究室が調査主体となって実施されました【写真1】。縄文時代の遺跡と想定されていましたが、調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒が発見されました。安房地域に

おける最初の弥生時代遺跡、弥生時代竪穴住居の調査で、出土土器は安房地域の弥生後期土器を代表する資料です。

昭和27年から29年には、地元高校生が中心となった発掘調査が行われています。27年には館山市東長田の谷遺跡、翌28年1月には南房総市石堂（旧丸山町）の石堂下栗野台遺跡、続いて29年には館山市出野尾の出野尾洞窟遺跡が、安房第一高校や長狭高校の生徒により発掘調査されました。石堂下栗野台遺跡では弥生時代の竪穴住居が発掘されています。

昭和31年には、複数の発掘調査が行われています。

まず館山市沼において安房水産高校（現在の館山総合高校の一部）の校地埋め立て工事に伴う土取り作業中に赤山遺跡が発見され、千葉県教育委員会の指導の下、急遽七月に安房郷土文化研究会により発掘調査が実施されました。破壊されてしまう遺跡の緊急調査です。10月には、館山市浜田に所在する鉦切神社の拝殿建て替えに伴って、鉦切洞窟遺跡の発掘調査が行われました。事前に千葉県教育委員会が重要遺跡と把握しており、館山市、早稲田大学考古学研究室および安房郷土文化研究会によって実施されました。続いて鉦切洞窟遺跡の発掘調査が終了した直後に、大寺山洞窟遺跡（館山市沼）を地元研究者が発掘調査しています。

### 9 第三期…昭和43年から56年頃

10年ほど目立った発掘調査がない期間を経て、この時期の考古学的調査は、大学の研究者による研究目的の調査のほか、県や市町村の教育委員会が計画した重要遺跡の確認調査や地域史解明の



写真2 安房国分寺跡（館山市）（筆者撮影）

ための発掘調査が目立つことが特徴です。また前の時期に引き続き、地元高校生が発掘調査に参加する機会がありました。

千葉大学の神尾明正・森谷ひろみ両氏が、昭和43年に古墳時代の祭祀遺跡であるつとるば遺跡（館山市沼）の調査を行い、昭和

45年には南房総市宮下（旧丸山町）で祭祀遺跡と考えられる宮下東畑遺跡を発見し、大場磐雄氏の指導のもと、発掘調査を行っています。南房総に特徴的な祭祀遺跡の調査です。

昭和49年から南房総市千倉町瀬戸ほかにおいて、平城宮木簡に名前がみえる古代の朝夷郡「健田郷」の解明を目的として、朝夷地区教育委員会（白浜町、千倉町、丸山町、和田町の合同）が東洋大学の玉口時雄氏に調査団長を依頼して、十三次に亘り健田遺跡群の発掘調査を行っています。発掘調査に際しては、東洋大学のほか早稲田大学の学生や、安房高校、長狭高校、安房農業高校（現在の安房拓心高校）などの地元高校生も参加しています。

昭和51年から安房国分寺跡の所在解明を目的に、千葉県教育委員会が三力年計画を計り、館山市を中心に調査会を組織して、発掘調査を実施しました。調査は早稲田大学の滝口宏氏を調査団長として、早稲田大学考古学研究室が主体となつて行いました【写真2】。

昭和54年から四次に亘り、南房総市石堂（旧丸山町）に所在する永野台遺跡（永野台古墳）の発掘調査を、朝夷地区教育委員会が実施しました。発掘調査は東洋大学の玉口時雄氏を調査団長として、同大学の考古学研究会を中心に行われ、安房農業高校の生徒も参加しています。

#### 9 第四期…昭和58年以降

南房総でのこの時期の遺跡調査の特徴は、開発に伴う事前の発掘調査が多くなったことと、遺跡の保存を意図した発掘調査（確

認調査）が行われるようになったことが挙げられます。開発に伴う発掘調査は、対象となる遺跡を選んで行うものではないため、それまでの研究目的の調査では対象とされなかった平野部の遺跡の発掘調査が行われるようになりました。また開発に伴う発掘調査には、体制が整えられた専門の調査組織が対応するようになったことも、この時期の特徴です。

開発に伴う発掘調査は、次のような事例があります。  
深名瀬島遺跡（南房総市富浦町深名）では、縄文時代中期の集落跡が調査されました。縄文時代の竪穴住居跡や集落の発掘は、南房総では初めてでした。

小滝涼源寺遺跡（南房総市白浜町白浜）と東田遺跡（館山市上真倉）では、古墳時代の祭祀遺構が発見されました。

仮家塚遺跡（南房総市府中、旧三芳村）では、弥生時代の墓域（方形周溝墓群）が発見されました。下ノ坊遺跡（鋸南町保田）、宇土台遺跡（館山市腰越）、萱野遺跡（館山市国分）、長須賀条里制遺跡（館山市下真倉）、東条地区遺跡群（鴨川市和泉ほか）などは平野部の遺跡であり、弥生時代から中世の遺構と遺物が発見されています。中でも萱野遺跡では、南房総で初めて弥生時代の環濠集落が発見されています。

保存・活用のための確認調査としては、稲村城跡（館山市稲と岡本城跡（南房総市富浦町豊岡）が千葉県教育委員会により確認調査が行われ、その後、館山市教育委員会によって稲村城跡の保存を目的とした総合的調査が実施されました。また古代安房国府の候補地でもある宝珠院跡（南房総市府中、旧三芳村）の



写真3 大寺山洞窟遺跡（館山市）（筆者撮影）

確認調査を、千葉県教育委員会が実施しています。

研究目的の学術調査は、大学の研究者たちによって見上遺跡（南房総市白浜町滝口）、大寺山洞窟遺跡（館山市沼）、安房神社洞窟遺跡（館山市大神宮）、仮家塚遺跡（南房総市府中）の発掘調査

が行われています。このうち大寺山洞窟遺跡は、平成5年から10年に千葉大学考古学研究室が発掘調査を行いました【写真3】。第五次調査にあたる平成8年からは、千葉県教育委員会と館山市教育委員会が加わって遺跡調査会を組織し、遺跡保存を視野に入れた調査が行われています。この洞窟は古墳時代には墓として利用され、丸木舟を使った舟葬墓という特徴的な墓制が発見され、貴重な成果となっています。

### ③ 南房総の考古学調査の特徴

戦前の黎明期の考古学調査は、大学の研究者など個人による短期間の調査でした。戦後になると大きく様相が変わり、昭和20年代には大学の研究者もしくは研究室による調査のほかに、地元研究者や高校生が主体の調査が一時さかんに行われました。終戦後の復興期にあつて、地域の人びとが考古学による発掘調査成果に期待し、考古学が地域に希望と活力を与えていたことを反映しています。昭和40年代以降は教育委員会が主導する発掘調査が多くなり、地域の歴史解明を目的とした調査が行われています。大学の研究者や研究組織による調査とともに、発掘調査に基づいた考古学による研究の成果が、地域の特色を明らかにすることに結び付いています。開発に伴う発掘調査が波及するよりも以前から、地域の歴史解明を目的とした発掘調査が行われてきたという経緯に、南房総の考古学と地域史研究の特徴を見てとることができます。

（池田 治）

表 南房総の考古学調査略年表（遺跡名の下の丸囲み数字は図1の遺跡番号と一致）

| 和暦    | 西暦    | 主な遺跡の発掘調査（調査者）・社会的出来事  | 調査の目的・対象 | 現所在地名       |
|-------|-------|--|----------|-------------|
| 明治22年 | 1889年 | 町村制施行と併せて町村合併促進（明治の大合併）  |          |             |
| 明治27年 | 1894年 | 清澄山麓古墳⑨発見の伝承記事（享保の頃の説）   | 不時発見     | 鴨川市清澄       |
| 明治32年 | 1899年 | 谷遺跡⑫が発見され、調査される（大野延太郎）   |          | 館山市東長田      |
| 大正8年  | 1919年 | 鉄道（現在の内房線）が安房北条駅（現在の館山駅）まで開通                                   |          |             |
| 大正12年 | 1923年 | 大正関東地震（関東大震災）  |          |             |
| 大正13年 | 1924年 | 守谷湾洞窟群④が発見される（江坂輝弥）  | 洞窟（縄文）   | 勝浦市守谷       |
| 大正14年 | 1925年 | 鉄道（現在の内房線）が安房鴨川駅まで全通   |          |             |
| 大正15年 | 1926年 | 後広場1号墳⑭が土砂採取による掘削で発見された  | 不時発見     | 鴨川市広場       |
| 昭和4年  | 1929年 | 鉄道（現在の外房線）が安房鴨川駅まで全通   |          |             |
| 昭和7年  | 1932年 | 安房神社洞窟遺跡⑮の発掘と大塚貝塚⑯の踏査（大場磐雄）                                    | 不時発見     | 館山市大神宮      |
| 昭和20年 | 1945年 | 安房国分寺跡⑰の一部発掘（平野元三郎・滝口宏）  | 寺院跡（古代）  | 館山市国分       |
| 昭和23年 | 1948年 | 加茂遺跡⑱が発掘調査される（慶應義塾大学）  | 低地遺跡（縄文） | 南房総市加茂      |
| 昭和24年 | 1949年 | 谷向貝塚⑩（A地点）の発掘（野口義麿・伊勢田進）                                       | 貝塚（縄文）   |             |
| 昭和25年 | 1950年 | 法隆寺金堂壁画焼損<br>文化財保護法制定（5月公布 8月施行）                               |          |             |
| 昭和26年 | 1951年 | 谷向貝塚⑩（B・C地点）の発掘（伊丹信太郎）   | 貝塚（縄文）   | 南房総市谷向      |
| 昭和27年 | 1952年 | 稲原貝塚⑪が発見（安房高校生）され、その後発掘される（3月酒詰仲男・岡田茂弘ら）（4月江坂輝弥ほか日本考古学協会特別委員会） | 貝塚（縄文）   | 館山市小原       |
| 昭和28年 | 1953年 | 大塚貝塚⑯の測量と試掘（安房第一高校郷土研究部）                                       | 貝塚（縄文）   | 館山市大神宮      |
| 昭和29年 | 1954年 | 田子台遺跡⑬の発掘調査（勝山町・千葉県教委・早稲田大学）                                   | 散布地（縄文）  | 鋸南町下佐久間     |
| 昭和31年 | 1956年 | 東長田遺跡⑲の発掘（安房第一高校と長狭高校の郷土研究会）                                   | 祭祀遺跡（古墳） | 館山市東長田      |
|       |       | 石堂下栗野台遺跡⑩の発見と発掘調査（神尾明正指導の下、安房第一高校君塚文雄・同校郷土史研究部）                | 散布地（弥生）  | 南房総市石堂      |
|       |       | 明鐘崎洞窟①が採石作業の掘削により発見された   | 不時発見     | 富津市金谷・鋸南町元名 |
|       |       | 町村合併法施行 この後5年ほどで合併進む（昭和の大合併）                                   |          |             |
|       |       | 出野尾洞窟遺跡⑫の発掘（神尾明正指導の下、安房第一高校生）                                  | 洞窟（縄文）   | 館山市出野尾      |
|       |       | 赤山遺跡⑲の発掘（千葉県教委指導の下、安房郷土文化研究会）                                  | 不時発見     | 館山市沼        |
|       |       | 鉦切洞窟遺跡⑬の発掘調査（千葉県教委・館山市・早稲田大学・安房郷土文化研究会）                        | 洞窟（縄文）   | 館山市浜田       |
|       |       | 大寺山洞窟遺跡⑭の発掘（山岡俊明・寺田信秀ら地元研究者）                                   | 洞窟（縄文）   | 館山市沼        |

|       |       |                               |          |             |
|-------|-------|-------------------------------|----------|-------------|
| 昭和32年 | 1957年 | 大房岬遺跡⑩の踏査（貝塚爽平・芹沢長介）          | 不時発見     | 南房総市富浦町多田良  |
| 昭和42年 | 1967年 | 翁作古墳⑭が工事掘削により発見された            | 祭祀遺跡（古墳） | 館山市坂井       |
| 昭和43年 | 1968年 | つとるば遺跡⑳の発掘（神尾明正・森谷ひろみ）        | 祭祀遺跡（古墳） | 館山市沼        |
| 昭和44年 | 1969年 | 宮下東畑遺跡⑭の発掘（神尾明正・森谷ひろみ）        | 集落（古代）   | 南房総市宮下      |
| 昭和45年 | 1970年 | 健田遺跡群⑱の発掘調査（朝夷地区教委・玉口時雄）      | 寺院跡（古代）  | 南房総市千倉町瀬戸ほか |
| 昭和49年 | 1974年 | 安房国分寺跡⑳の発掘調査（千葉県教委・館山市・早稲田大学） | 古墳（古墳）   | 館山市国分       |
| 昭和51年 | 1976年 | 永野台遺跡⑮の発掘調査（朝夷地区教委・玉口時雄）      | 古墳（古墳）   | 南房総市石堂      |
| 昭和54年 | 1979年 | 稲村城跡⑮の発掘調査（千葉県文化財センター）        | 城館跡（中世）  | 館山市稲        |
| 昭和58年 | 1983年 | 深名瀬島遺跡⑨の発掘調査（富浦町教委）           | 開発事前の発掘  | 南房総市富浦町深名   |
| 昭和60年 | 1985年 | 岡本城跡⑧の確認調査（千葉県文化財センター）        | 城館跡（中世）  | 南房総市富浦町豊岡   |
| 昭和61年 | 1986年 | 飯塚塚遺跡⑫の発掘調査（三芳村教委）            | 開発事前の発掘  | 南房総市府中      |
| 昭和62年 | 1987年 | 宝珠院遺跡⑬の確認調査（千葉県教委）            | 国府跡（古代）  | 南房総市府中      |
| 昭和63年 | 1988年 | 小滝涼源寺遺跡⑲の発掘調査（朝夷地区教委・白浜町）     | 開発事前の発掘  | 南房総市白浜町白浜   |
| 昭和64年 | 1989年 | 見上遺跡⑳の発掘調査（玉口時雄・谷川章雄）         | 祭祀遺跡（古墳） | 南房総市白浜町滝口   |
| 昭和65年 | 1990年 | 下ノ坊遺跡②の発掘調査（千葉県文化財センター）       | 開発事前の発掘  | 鋸南町保田       |
| 昭和66年 | 1991年 | 大峰畑遺跡⑥の発掘調査（千葉県文化愛センター）       | 開発事前の発掘  | 南房総市高崎      |
| 昭和67年 | 1992年 | 要害山城跡⑤の発掘調査（千葉県文化財センター）       | 開発事前の発掘  | 南房総市二部      |
| 昭和68年 | 1993年 | 東条地区遺跡群⑦の発掘調査（鴨川市遺跡調査会）       | 開発事前の発掘  | 鴨川市和泉ほか     |
| 昭和69年 | 1994年 | 長須賀条里制遺跡⑯の発掘調査（千葉県文化財センター）    | 開発事前の発掘  | 館山市下真倉      |
| 昭和70年 | 1995年 | 大寺山洞窟遺跡⑳の発掘調査（千葉大学考古学研究室）     | 洞窟（古墳）   | 館山市沼        |
| 昭和71年 | 1996年 | 東京湾横断道路（アクアライン）開通             |          |             |
| 昭和72年 | 1997年 | 東田遺跡⑲の発掘調査（千葉県文化財センター）        | 開発事前の発掘  | 館山市上真倉      |
| 昭和73年 | 1998年 | 菅野遺跡⑳の発掘調査（千葉県文化財センター）        | 開発事前の発掘  | 館山市山本・国分    |
| 昭和74年 | 1999年 | 館山自動車道＋富津館山道路（富浦ICまで開通）       |          |             |
| 昭和75年 | 2000年 | 平成の市町村合併（平成の大合併）安房地域は3市1町に    |          |             |
| 昭和76年 | 2001年 | 宇土台遺跡⑳の発掘調査（千葉県文化財センター）       | 開発事前の発掘  | 館山市腰越       |
| 昭和77年 | 2002年 | 稲村城跡⑮の確認調査（館山市教育委員会）          | 城館跡（中世）  | 館山市稲        |
| 昭和78年 | 2003年 | 菅野遺跡⑳の発掘調査（千葉県文化財センター）        | 開発事前の発掘  | 館山市国分       |
| 昭和79年 | 2004年 | 安房神社洞窟遺跡㉑の発掘調査（千葉県大学考古学研究室）   | 洞窟（縄文）   | 館山市大神宮      |
| 昭和80年 | 2005年 | 岡町遺跡⑦の発掘調査（千葉県教育委員会）          | 開発事前の発掘  | 南房総市富浦町南無谷  |
| 昭和81年 | 2006年 | 飯塚塚遺跡⑫の発掘調査（白石哲也ら飯塚塚遺跡発掘調査団）  | 集落（弥生）   | 南房総市府中      |



## 人が動く、石器も動く！

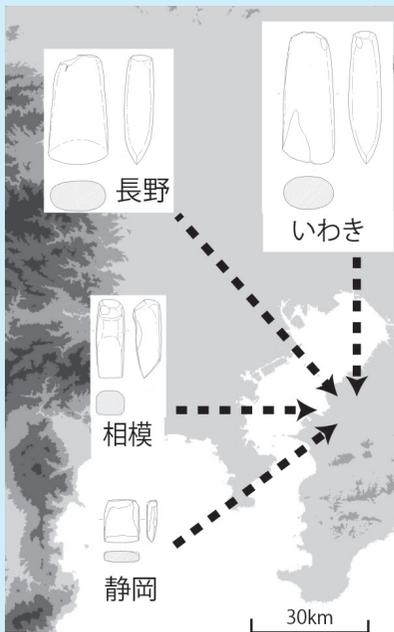


図1 房総半島にもたらされる石器。  
図示は千葉市城の腰遺跡出土（菊池ほか  
1997、S=1/10）

稲作を行うための道具として、**鍬**や**鋤**などの木製農具が挙げられます。これらは硬いカシの木を切り倒し、加工して作られたものです。日本史の教科書には、弥生時代は鉄器が使われはじめた時代であると書かれていますので、こういった作業も鋭利な刃を持つ鉄の斧で行っていたと想像されるかも知れません。しかし、**仮家塚**の集落が営まれた弥生時代中期の関東地方の遺跡からは鉄器はほとんど出土しておらず、人びと

は石で作られた斧によって作業を行っていたと想定されます。そして、水田を作るための道具の素材調達のためには、堅い木を切ることができる頑丈な石斧の入手が重要であったと言えます。

石斧の入手方法には二つのパターンが想定されます。一つ目は、「原石から製作する」という手法です。これは強い衝撃に耐え得る、「緻密で硬く、重い」という条件を満たした原石を採集できる環境が集落の近くになければいけません。しかし、千葉県域ではこのような条件に適合する石材がほとんど産出しないため、この方法は難しかったと思います。

次に、「完成品を他地域から搬入する」という方法があります。

実際、千葉県域から出土する石斧を観察していると、遠隔地から持ち込まれた石斧がたくさんあります【図1】。例えば、神奈川県さがみの相模川流域で製作されたものを千葉県で見つけることができます。緑色を呈する凝灰岩製（火山噴出物が堆積し、固まってできた岩石）の石斧が東京湾東岸地域を中心に千葉県内の各地で出土しています。

その他にも、埼玉県や群馬県といった関東北部地域から搬入される石斧もあります。よく見られるのは、大量に石斧を製作していた静岡・清水平野、長野盆地、いわき地方北部など、各地域で特徴的な石材で製作された石斧です。これは、持ち込まれた石斧で、使用不可能な長さになるまで丹念に刃を研ぎ直したり、「伐採用から加工用へ」というように別の器種に作り変えたりしながら使われたものがたくさんあります。このように、石器をはじめとした日常生活で用いる道具の中には、人びとが交流することで、地域を超えてもたらされたものが多く、当時の地域間交流を考えるうえで貴重な資料となります。（杉山功成）

## 5

## 住居——房総半島の竪穴住居と仮家塚遺跡が重要な理由

竪穴住居とはどのような住居なのか  
 弥生時代の竪穴住居とはどんな様子だったのか  
 千葉県内で卓越した規模を誇る仮家塚遺跡の住居

\*\*\*

2021年度から2024年度まで3年間かけて行ってきた仮家塚遺跡の発掘調査は、とうとう目的とする竪穴住居の検出に成功しました。発掘を始めた当時は、まだコロナ禍で、調査を続けていくこと自体が不透明な日々でした。今ではそんな心配もなく、発掘調査は以前の様子を取り戻しつつあります。そんなタイムリングで住居を検出することができ、我々は大喜びでした。しかし、ここで新たな心配が一つ。「はたしてこれがお墓と同じ時期の住居なのか?」。今後の調査では、この住居の時期が大きな問題となります。なぜ、仮家塚遺跡の竪穴住居の時期が重要な

か。ここでは、房総半島の弥生時代の様子を概観しながら解説していきます。

## ① 竪穴住居とは何か?

仮家塚遺跡の竪穴住居についてお話する前に、まずは竪穴住居とは、どのようなものなのかを説明します【写真1】。「竪穴」住居とは簡単に言ってしまうと半地下の住居です。地面にある程度の広さの穴を掘り、底面を平らにして床をつくります。そこに柱を立てて骨組みを構築し、萱や土などを屋根とした住まいです。住居の中央付近には炉が設けられるのが一般的で、屋内の照明や採暖の役割を果たしていました。床面が地表面より低いため住居の一部が地面に覆われます。そのため保温性が高く、寒冷な地域に適した住居スタイルの一つと考えられます。幕末から明治初期の北海道（蝦夷）では、アイヌの人びとが竪穴住居に居住していたという報告が文献に記録されています。



写真1 弥生時代の竪穴住居復元例。外から見ると茅葺の屋根部分だけが見えるが、実際は半地下になっている（東京都町田市本町田遺跡 Y-3号住居、著者撮影）。

しは見つかります。耐用年数が過ぎただけではなく、何らかの規則や考えに基づいて住居を廃棄していた可能性もあります。最大で十数年ほど住めたと考えられますが、もつと短期間で廃棄されたと考える方が妥当ではないでしょうか。

竪穴住居が日本列島にはじめて出現した時期には諸説ありますが、縄文時代早期（今から約1万年前）には確実に存在していました。このころから、人類は短期間で移動を繰り返す生活から長期間同じ場所に定住するようになりました。では、竪穴住居はいったいどのくらいの期間利用されたのでしょうか。縄文時代の竪穴住居を理化学的に分析して年代を調べた結果、12〜13年ほどで廃棄されていたことが、これまでの研究で明らかになっています（小林2004）。柱は屋内とはいえ地面に直接立てているため、そこから腐食がはじまります。コンクリートの基礎の上に柱を建てる現代の建築とは異なり、竪穴住居は何十年も維持できるものではありません。また、中には焼け落ちた状態で発掘される住居もしばしば見つかります。

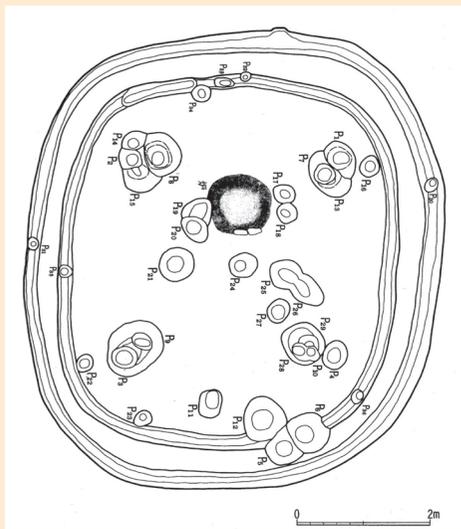


図1 建て替えの痕跡がみられる竪穴住居（著者加筆）。同心円状に溝がまわり、柱穴が動していることから、内側の小さい住居から外側の大きな住居に建て替えが行われたことがわかる（横浜市大塚・歳勝土遺跡 Y17号住居 1991）。

そのため、竪穴住居はしばしば改修や建て替えなどを行った形跡が見られます【図1】。一軒丸ごと建て替えるものもあれば、一部のみものもあります。建て替えの背景には住居の耐用年数の経過だけでなく、出産などにより世帯の人数が変化する場合などさまざまな要因が関係したと考えられます。

## ② 弥生時代の房総半島の竪穴住居

それでは、仮家塚遺跡が利用されていた弥生時代の竪穴住居について記していきます。弥生時代でも、人びとの一般的な住まいは竪穴住居でした。この時期の住まいには他に、平地式住居や高床住居などが存在します。平地式住居とは、地面を掘り下げずそのまま床面として上に屋根を架けたもので、その分布は北陸な

ど一部の地域に集中しており、日本列島全域で見られるものではありません。次に、高床住居は地面に柱を立てて地表面より高い位置に床面を設けた住居です。土器や銅鐸どうたくなどに高床住居が描かれていることから実在したことは間違いありません。しかし、発掘現場では上屋うわやを支えた柱の穴しか検出されないため実際の構造を知ることはできません。以上から、弥生時代の一般的な住まいとしては竪穴住居とするのが現状では最も妥当だと考えられます。

関東地方では、縄文時代の終わりから弥生時代の初め頃（約3000〜2500年前）になると、それまでたくさん建てられていた竪穴住居の姿があまり見られなくなります。これは住居に限った話ではなく、土器や石器などさまざまな生活の痕跡が一気に減少します。この時期に一般的にみられるのは、再葬墓さいざうぼといわれるお墓ぐらいです。再葬墓とは、一度埋葬した遺骸を土器に埋納して地面に埋めたお墓で、出土するのはほとんど土器のみです。千葉県内では市原市武士遺跡いちばらしたいしが有名です。ごくまれに出土するこの時期の竪穴住居は、掘り込みが浅く、平地式住居と区別が難しいものばかりです【図2】。なぜこのようになったのかについては、不明確な部分が多いのですが、一説にはこの時期に地球全体が寒冷化したことにより植生が変化し、食料を求めて頻繁に移動するようになったためと考えられています（設楽2006）。この時期、房総半島でも竪穴住居はほとんど見られません。成田市荒海川表遺跡なりたしあらかみなどでこの時期に該当する住居がわずかに検出されるのみです【図3】。検出された住居は掘り込みが浅く、楕円形または隅丸方形の平面プラン（真上から見た住居の平面形）である

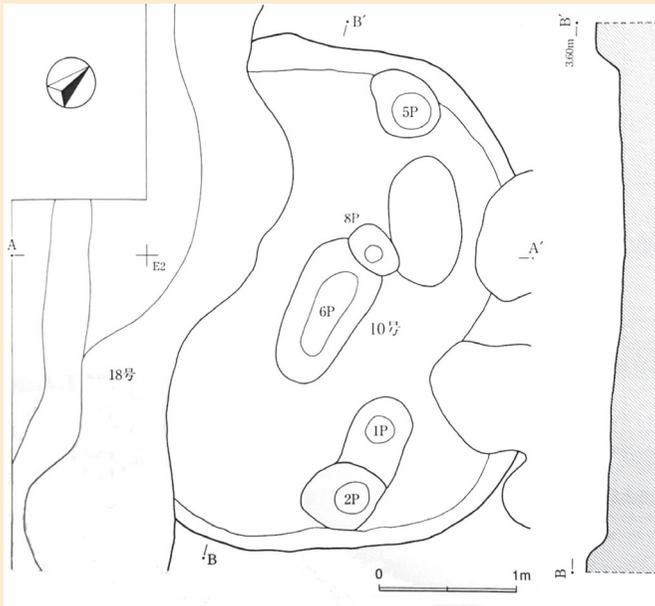


図3 千葉県内の弥生前期の竪穴住居（著者加筆）。柱穴らしきものがみられるが掘り込みが浅く、実態は不明である（荒海川表遺跡10号竪穴住居2001）。

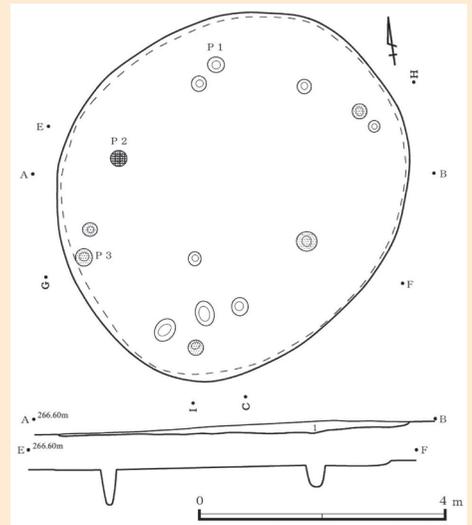


図2 掘り込みの浅い竪穴住居（著者加筆）。住居の掘り込みが浅く、検出が難しい。炉や柱の位置も不明確である（中野谷原遺跡16号住居2004）。

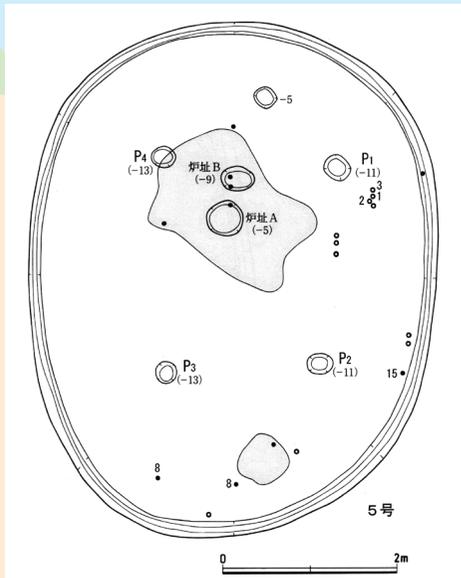


図4 弥生時代中期中葉の竪穴住居跡（著者加筆）。平面が楕円形で、柱穴配置は長方形で、炉が住居の長軸上に設けられる（小田原市中里遺跡5号住居 2015）。



図5 弥生時代中期後葉の竪穴住居跡（著者加筆）地域によって平面形の差はあるが、柱穴の配置、貯蔵穴、炉の位置などが中期中葉に比べてかなり定型化している（市原市菊間遺跡26号住居 1974）。

数多くの集落が形成されます。遺跡の分布密度が高いことで有名な地域として、神奈川県つるみがわの鶴見川・早濑川はせがわ流域があります。ここでは、横浜市大塚・歳勝土遺跡さいかちど

ことが分かります。柱穴らしきものも検出されていますが、半分は破壊されてしまっているため詳細はよくわかりません。

その後の時期（弥生時代中期中葉（約2400～2300年前））になると、関東地方で明確な竪穴住居の痕跡が見られるようになります。この時期に出現する大規模な集落遺跡が、神奈川県さがみわん小田原市中里遺跡です。相模湾の西部に面した低地に造営され、100軒を超える竪穴住居が検出されています。水路状の遺構や炭化米たんかまいが検出されていることから水稻農耕をしていたと考えられています。そのため、関東でも稲作が本格的に始まった時期にあたります。

この遺跡の住居は平面プランが楕円形や小判形、隅丸長方形など縦長の形状のものが多く見られます。また、内部には4本の支柱穴や中心よりやや奥に炉が設置され、出入口付近には貯蔵穴と考えられる穴が設けられます【図4】。内部設備は住居によって若干違いはあるものの、大半の住居で共通しており、ある程度定

型化した住居がこの時期にすでに存在していました。この他にも埼玉県熊谷市池上・小敷田遺跡こしまだで竪穴住居が比較的まとまって検出されています。こちらは平面プランが隅丸長方形や隅丸方形で中里遺跡とは若干異なりますが、支柱穴の数や炉の位置など共通する部分も見られます。中里遺跡ほど多くはありませんが、池上・小敷田遺跡もこの時期の住居の様子を知ることができる数少ない集落遺跡です。残念ながら千葉県内ではこの時期の竪穴住居はほとんど見つかっておりません。市川市木戸遺跡きとぐちで竪穴住居が1軒検出される程度で、中里遺跡や池上・小敷田遺跡のようにある程度の規模をもつ集落遺跡は今のところ確認されていません。しかし、君津市常代遺跡きみつしとじろでは方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼといわれるお墓が数多く見つかっていることから、千葉県内でも規模の大きい集落が存在してきた可能性は非常に高いと言えます。

そして、今からおおよそ2200年～2000年前（弥生時代中期後葉）になると、南関東では水稻農耕社会が本格的に発展し、

や折本西原遺跡などの大規模な環濠集落の周辺にいくつかの小規模な集落がつけられ、集落同士が密接に結びついていたと考えられます。千葉県でも佐倉市六崎大崎台遺跡や市原市菊間遺跡、八千代市田原窪遺跡など比較的大規模な環濠集落の周辺に小規模な集落が見受けられ、同じような集落間の関係性があつたと考えられます。

この時期の竪穴住居は、定型的で規模が大きなものが見られるのが特徴です。定型的というのは平面プランと内部の設備の配置が共通しているということです。具体的には図5に示したように、小判形または隅丸長方形といった縦長の平面プランをもち、その縦軸の中心線（長軸）上に炉や出入口がつけられます。このような構造は「対称構造」と呼ばれ、東日本の弥生時代の竪穴住居に広く共通する特徴です（都出1985）。この時期の南関東の竪穴住居はこの他にも共通する点があります。炉の位置が奥側の主柱穴を結んだラインよりもやや手前に位置する点。また、出入口のすぐ右手側貯蔵に使われたと考えられる穴が設けられる点や、壁面の土止めのための板を設置した溝がある点などです。すべての住居が共通するわけではないのですが、長軸が約6メートル以上の住居になると一気に規格性が強まり、大型の住居ほど定型的になります。

また、規模が大きいというのは長軸が10メートルを超えるような大型の竪穴住居が出現することを指します。このような住居は「大形住居」とよばれ、大きいものは長軸約15メートルにもなります（神奈川県三浦市赤坂遺跡、千葉県市原市大厩遺跡など）。

長軸が15メートルもある住居の床面積は約150平方メートルとなり、現在でいえば一般的なコンビニエンスストアと同程度の面積となります。当時の平均的な住居の床面積が20〜30平方メートルであることから、大形住居の床面積は一般的な住居のおよそ5倍です。いかに卓越した規模を誇っているかがわかります。しかし、大形住居がどのような目的で建設されたのかは明確にはわかっていません。内部の構造が一般的な住居と変わらない点から住まいとみなし、社会的地位が上位の「家族」が住んでいたと考えられることもできます。一方で、その広さを重視して、共同の作業場や集会場のような公共施設であつたとみることもできます。いずれにせよ、面積が広いということは多くの人を収容することを目的としているはずで、一般的な住居とは異なる目的を持って建築されたことは間違いありません。

### ③ 発見!? 仮家塚遺跡の竪穴住居

他の章で記されている通り、仮家塚遺跡では方形周溝墓と言われるお墓が検出されています。お墓があるということは周辺には集落が存在した可能性が高く、調査が待たれているところでした。そんなタイミングで、今回、私たちの調査で住居が発見されたのです。

今回検出した竪穴住居は長軸約10メートル、短軸約8メートルで規模が大きい部類に入ります【写真2】。お墓と同時期（弥生時代中期後葉）の千葉県内では竪穴住居が約700軒検出されて

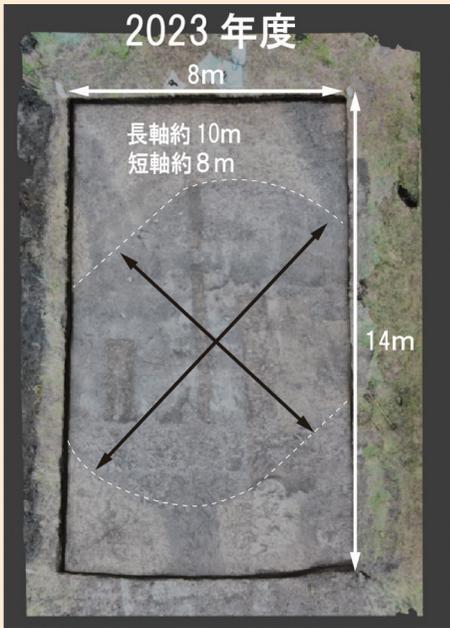


写真2 検出された仮家塚遺跡の竪穴住居。点線で囲った土が暗くなっている部分が竪穴住居の部分。内部の調査はまだこれからである（南房総市仮家塚遺跡（著者が三次元測量））。

います。そのうち長軸10メートルを超える住居は、復元したものも含めて今のところ10軒しか検出されておりません。今回発見された住居は千葉県内で卓越した規模を誇ります。この他に現在判明しているのは住居の平面形が小判のような形をしている点と住居の壁面に沿って溝が掘られている点です。平面形については、前述したように小判形になるのは弥生時代中期後葉の特徴の一つです。壁面の溝は「壁周溝」と呼ばれ、壁面の土が崩れないように板をはめ込んだ溝です。こちらも弥生時代中期後葉の竪穴住居によく見られる構造です。このように現在判明している情報から判断すると、この住居は弥生時代中期後葉の可能性があると言えます。仮にこの住居がお墓と同時期（弥生時代中期後葉）であった場合、水稲農耕が本格的に展開した比較的早い段階に大規模な住居が存在したことになります。しかも、房総半島では最も早い時期の弥生時代の住居になります。冒頭で触れたように、仮家塚遺跡の住居の時期が重要であるのはこのためです。異なる時期の

住居である可能性も十分にあります。しかし、表をみると、弥生時代中期後葉の長軸約10メートルの竪穴住居の規模は今回検出された住居とほぼ同じです。房総半島の初期の弥生時代の住居が仮家塚遺跡となるのかに期待が膨らみます。今後の発掘調査では炉や貯蔵穴がどこで検出されるのが時期を決定するのに重要となります。

\* \* \*

今回は仮家塚遺跡で竪穴住居が検出されたことをきっかけに、千葉県域の弥生時代の竪穴住居について簡単にご紹介しました。竪穴住居とはどのような住居か、弥生時代の竪穴住居とはどのような様子なのかが少しでも伝わっていただけましたら幸いです。これまでの発掘では住居を検出しただけで、まだ実際にその中を掘っているわけではありません。本格的な調査は、これからになります。

（佐藤兼理）

表 千葉県内の長軸10m以上の竪穴住居

| 市町村  | 遺跡名   | 遺構     | 長軸 (m) | 短軸 (m) |
|------|-------|--------|--------|--------|
| 市原市  | 大厩    | 38号住   | 11.8   | 10.6   |
| 市原市  | 大厩    | 44号住   | 15     | 12.5   |
| 市原市  | 椎津茶ノ木 | 123号住※ | 13     | 不明     |
| 市原市  | 御林跡   | 146号住※ | 10     | 8.6    |
| 市原市  | 草刈I地区 | 293号住※ | 11.8   | 9.8    |
| 市原市  | 祇園原貝塚 | 26号住※  | 10.5   | 8.3    |
| 木更津市 | 美生    | 145号住  | 10.5   | 8.7    |
| 佐倉市  | 六崎大崎台 | 300号住  | 11.4   | 9.6    |

※は復元値含む



## 発掘ってこんな感じ！

皆さんは、発掘調査と聞いてどのような姿を思い浮かべるでしょうか。調査員がハケをもって慎重に土器をとりあげているシーンをテレビ等で見たことがあるかもしれません。しかし、実際の発掘調査はもっと皆さんの作業から成り立っています。ここでは、実際の発掘調査がどのように行われているかをお話ししながら、皆さんに発掘調査について興味を持っていただければと思います。

### ① どうして時期がわかるの？

考古学は、主に「型式学」と「層位学」という二つの考え方から歴史を還元する学問です。

型式学とは、ダーウィンの進化論をもとに、スウェーデンの考古学者モンテリウス

によって考案された方法で、歴史資料の形態や装飾を比較し、一定の原理に基づいて古いものから新しいものへ、時間的に配列するものです。

一方で層位学は、地質学に基づいた考え方であり、攪乱されていない地層においては、同一地点の下層の堆積は上層より古い、という地層累重の法則に基づいています。

考古学では、これら二つの考え方をともに、発掘調査によって発見された遺構や遺物の時期を決定し、調査成果として活用しています。

### ② 学術調査と緊急調査

現在、日本国内で実施されている発掘調査の実に9割は、開発によって遺跡が破壊

されてしまう前に緊急で実施した調査になります。今回、私たちが仮家塚遺跡で行っている調査は、そのような緊急調査ではなく、学術調査と呼ばれる研究のための調査になります。そのため、遺構や遺物の情報を最小限の破壊で最大の情報が得られるよう、また、調査の成果について後世の考古学者たちが検証できるよう、調査方法についても詳細な検討が必要となります。

### ③ 調査計画

調査を始めるにあたり、まずは調査計画を立てます。今回の調査の目的、そのため調査区の設定、記録の方法など調査内容の具体的な方法から、調査人数や宿の手配といったさまざまな事柄について、皆で協議しながら計画を策定していきます。よ

い調査は、よい計画がもたらしてくれます。今回の私たちの調査の目的は、弥生時代中期後葉、宮ノ台式期最古の集落跡の検出です。仮家塚遺跡は、千葉県内における宮ノ台式期最古の方形周溝墓群が見つかった遺跡として著名な遺跡ですが、立地や出土土器等の検討の結果、周辺に集落跡が所在する可能性が考えられることから、過去の調査区に隣接した場所を発掘調査することによって検証を行うこととなりました。

#### ④ 確認調査

調査計画が決まったら、まずは確認調査を実施します。確認調査とは、調査区内にトレンチと呼ばれる確認用の長方形の溝を掘り、遺構確認面と呼ばれる当時の文化層の状況を確認する調査です【写真1】。遺跡内に遺構の掘り込みがあった場合、その後、遺跡が廃絶され土砂が堆積する過程で遺構確認面とは別の土が入り込み、覆土の色の違いとして検出されます。トレンチ内部の清掃は、ジョレン【図1】とミと呼ばれる農具を使います。遺構が検出された場合は、移植ゴテ【図2】と呼ばれる園芸用



写真1 確認調査のようす

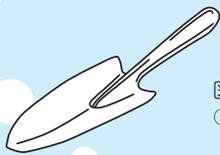
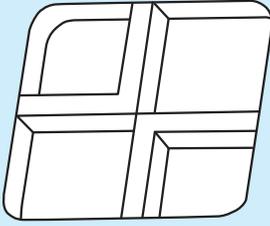


図2 移植ゴテ  
(文化庁編 2010 をトレース)



図1 ジョレン  
(文化庁編 2010 をトレース)

十字形畔



四分法

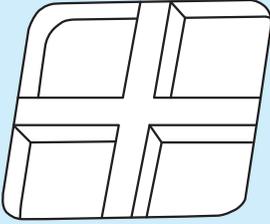


図3 ベルトの設定方法  
(文化庁編 2010 をトレース)



写真2 本調査のようす

のスコップでさらに細かな調査を行っていきます。仮家塚遺跡の遺構確認面は現在の表土から約40センチメートル、やや砂質の地層で検出されました。さらに確認面を掘りこむと遺構と考えられる黒い覆土が確認され、少量ながら遺物も確認できました。次は、本調査と呼ばれる、さらに詳細な調査を実施することとなります。

### ⑤ 本調査

本調査は、確認調査によって検出された遺構について、その詳細な性格や帰属する時期などを知るために、遺構自体を調査するものです【写真2】。本調査はまず、検出された遺構の形状を確認し、層位学に基づく観察を行うための土層観察ベルト（遺構の土を掘らずに残した部分）を設定します【図3】。ベルトは遺構の長軸と短軸に対して直角に設定することが一般的です。仮家塚遺跡で検出されている住居跡は当初、調査区の大部分に広がっていたため、その規模や性格がわかりませんでした。遺構の重複の可能性もあるため、検出面と並行してベルトを設定しましたが、最終的には大

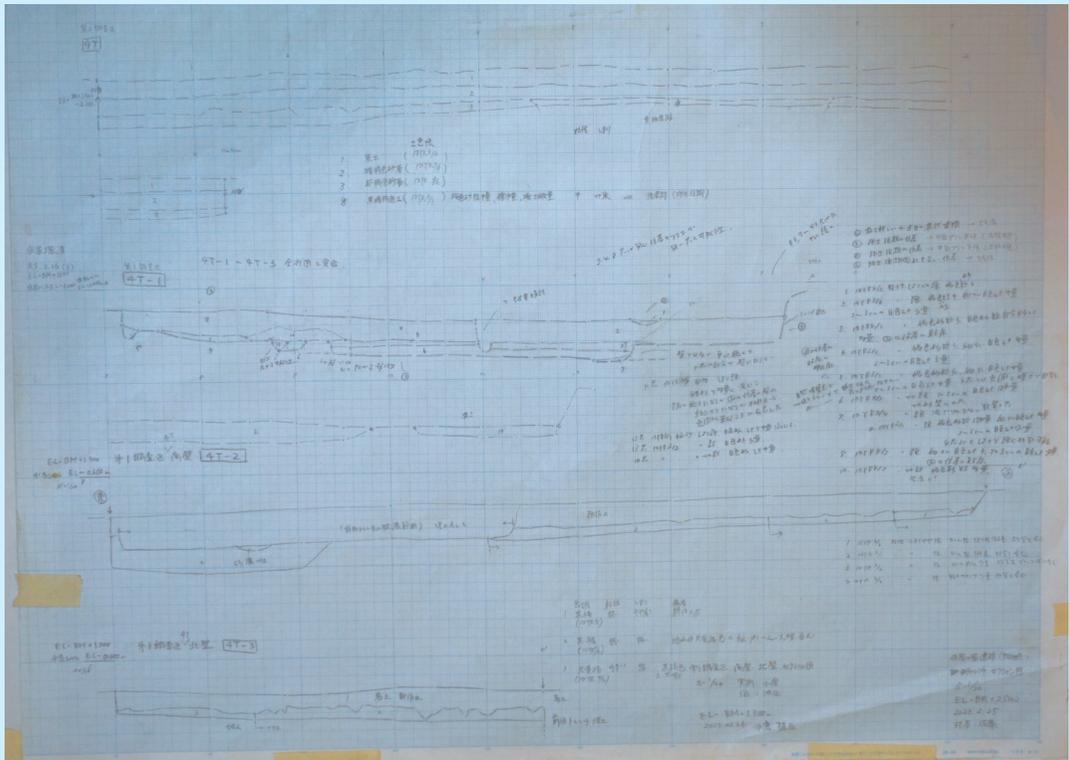


図4 セクション図

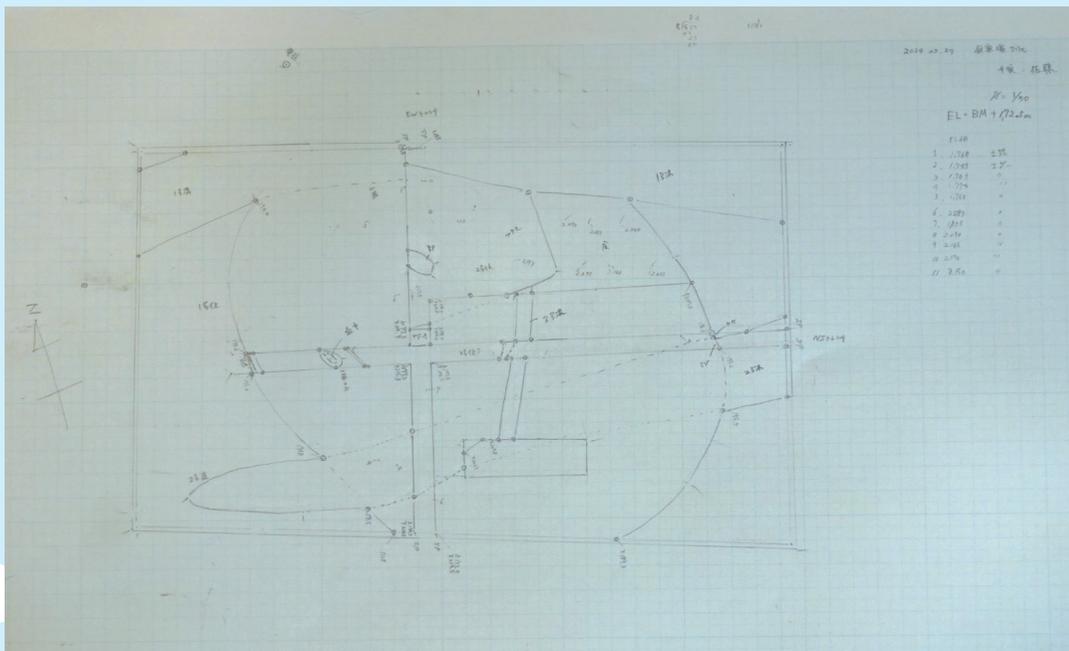


図5 平面図



図6 LiDARによる3Dモデル

型住居の跡だということがわかりました。

#### ⑥ 記録保存

遺構が検出できたら、図面と写真で記録していきます。図面は一般的に、セクショ

ン図と呼ばれる土層断面図【図4】と、平面図【図5】から構成され、3次元の情報として図化していきます。また、必要に応じて、全体の遺構配置図や出土した土器の微細図、コンタ図と呼ばれる現況の等高

線図等も作成します。今回の調査では、そのほかにLiDAR（ライダー）と呼ばれる簡易的なレーザー測量を実施し、3Dモデル化も行っています【図6】。また、調査地点は世界測地系に基づくXY座標と、水準測量の成果を応用した標高を活用し、位置情報を正確に把握しています。これらの計測によって、より精度の高い情報を記録していきます。また、学術調査である今回の仮家塚遺跡の調査では、遺構をすべて掘り上げることはせず、ベルトを残すことによつて後世の考古学者がその成果を検証できるようにしています。

#### ⑦ 整理作業

現場での調査が終わると、整理作業と呼ばれる段階に入ります。現場で作成した図面の修正を行うほか、出土した土器の整理も行います。具体的には、土器をきれいに洗う水洗、出土情報を1点1点記入する注記を行った後、ばらばらになった土器を接合し、可能な限り当時の姿に復元します【写真3】。復元が完了すると、実測作業を行い図化します【写真4】。縄文土器など文



写真3 復元



写真4 実測

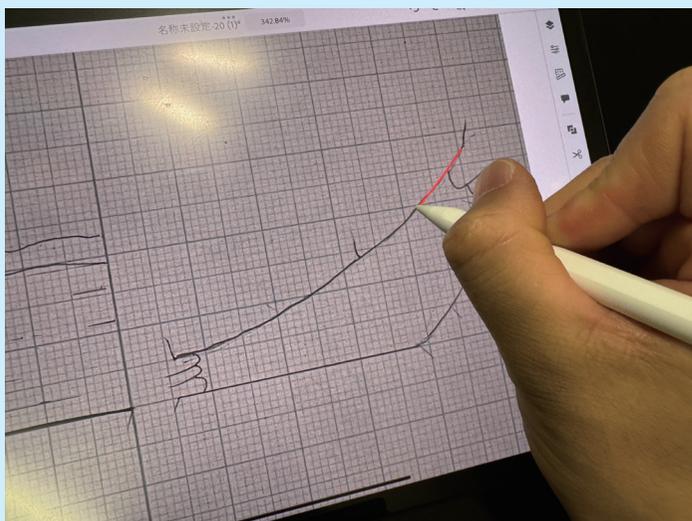


写真5 トレース

### ⑧ 報告書の作成

様が施される個体は、拓本たくほんと呼ばれる墨を用いた複写も行います。遺構と遺物、双方を可能な限り当時の状況に復元し、図面を作成する作業です。

整理作業が終わると、報告書の作成となります。遺構及び遺物の図面を丁寧にト

レースし【写真5】、清書します。そのほか、遺物の観察表や土層説明に加え、調査に至る経緯や遺跡の環境等、複合的な情報を記述し、報告書を刊行します。ここまで行って初めて、発掘調査が完了したことになります。

今回の仮家塚遺跡の調査では、これから正式な報告書を作成することとなります

が、市民の皆さんにいち早く調査成果をお知らせしたいと考え、このような冊子を作成しています。皆さんが普段何気なく聞き知っている発掘調査というものが、このような多くの作業から成り立っていることを知っていただければ幸いです。

(根本岳史)

# 6

## 墓——仮家塚遺跡の方形周溝墓と弥生時代のお墓

弥生時代のお墓の歴史から社会の変化がわかる  
では仮家塚遺跡のお墓からは何がわかるのか  
房総半島全体から考えてみよう

### ① 弥生時代の墓制

仮家塚遺跡で見つかったお墓は、方形周溝墓と呼ばれる四方を溝で区画したお墓です。ただし、弥生時代のお墓が方形周溝墓だけかと言えば、そうではありません。実は、弥生時代には、地域・時期によってさまざまなお墓が作られます。これら墓制を読み解くことで、弥生時代の社会の変化を知ることができます。弥生時代の墓制の変遷に関しては、以下のような大きな流れが想定されています（安藤2022）。

#### 〈第1段階〉

弥生文化初頭の無文土器文化系・縄文文化系の要素が色濃い集団墓の段階

#### 〈第2段階〉

弥生中期を中心とした地域色のある大規模集団墓の段階

#### 〈第3段階〉

弥生後期・終末期の埋葬される人が限定的となり墳丘を持つ墓が発達する段階

まず、第1段階は弥生時代のはじまりの頃、北部九州に朝鮮半島の墓制が入ってきます。ここでは、副葬品の有無などから、すでに集団に格差が生じていたことがわかっています。一方で、北部九州以外の地域では、縄文時代から続く土器棺墓が中心となります。ここでは、副葬品があまり見られません。つまり、集団間に階層差があったとは考えられません。関東地方では、遺骸を繰り返し処理し、最後に壺の中に遺骸の一部を収めた再葬墓と呼ば

れる墓制が次の中期まで続きます。

次の**第2段階**になると、方形周溝墓や区画墓くわくぼと呼ばれるお墓が登場します。方形周溝墓は、近畿地方を中心に作られた溝で区画されたお墓です。区画墓は溝や墳丘で区画したお墓で北部九州や中国・四国地方に見られる墓制です。これらは、地域差はありますが、多数埋葬や周溝での埋葬などがみられます。

もう少し詳しくお話しすると、方形周溝墓は、東京都宇津木うつぎ向原遺跡むこうはらではじめて認識されました。溝で区画され、埋葬施設には副葬品があったことから、古墳の発生に関わる墓制として重要視されました（大塚・井上1996）。実際、これらの方形周溝墓や区画墓のなかには、大規模な墳丘を持つものや、副葬品を伴い、赤色顔料が塗られるなど、明らかに階層差を持つものも存在します。そのため、埋葬された人物については、「首長」や「指導者」、「家族集団」などさまざまな見解が出されてきました。現在では、より広い範囲で周辺集落も含めた人びとが葬られた可能性が指摘されています。

では、仮家塚遺跡に葬られた人びとはどのような人たちだったのでしょうか。仮家塚遺跡の方形周溝墓は、それほど大きくなく、群集しています。つまり、あまり大きな階層差はなく、家族墓のようなものであったと推察されます。そして、南房総に西からやってきた人たちが、自分たちの故地こちが臨める小高い場所に作ったのかもしれない。実際、仮家塚遺跡から西には東京湾が、その先には三浦半島が見えます。そして、さらに先に富士山があるので、私わたし（白石）は富士の麓ふもと、小田原おだわらの地からやってきた人たちが

故郷を想ったのではないかと想像します。

最後に、**第3段階**では方形周溝墓は各地で減少し、副葬品を伴う赤彩された木棺墓もくかんぼが登場していきます。この時期、鳥根県や鳥取県などの山陰地域では四隅突出型墳丘墓よすみとつじふたんきゅうぼと呼ばれる巨大な墳丘墓も作られます。これらは埋葬される人が特別な埋葬施設に限定されていく現象と考えることができます。このうち、奈良盆地に大規模な前方後円墳が出現し、古墳時代がはじまります。

それでは、次に南房総を中心に房総半島のお墓について見てみましょう。  
（白石哲也）

## ② 房総半島の墓制

房総半島では、君津市きみつしの周辺で最も古い時期の方形周溝墓が見つかっています。鹿島台遺跡かしまいたいでは、方形周溝墓の溝の中に大型の壺形土器つぼがたどきがまとまって置かれており、方形周溝墓が導入された後も再葬の伝統が残っていた可能性が考えられています。

房総最古の本格的な農耕集落といわれる常代遺跡とこしろでは、調査範囲に限っても約200基の大きささまざまな方形周溝墓が発見されました【図1】。その中には、一辺が約20メートル、溝の幅が約3メートルの大型方形周溝墓も見つかっています。その形は、東海地方の伊勢湾沿岸で見つかっている墓とよく似ています。また、常代遺跡では伊勢湾沿岸を故地とする土器も出土していることから、方形周溝墓は東海地方から直接伝わった可能性があまりありません。常代遺跡では、出土した土器から判断して、200年以上に

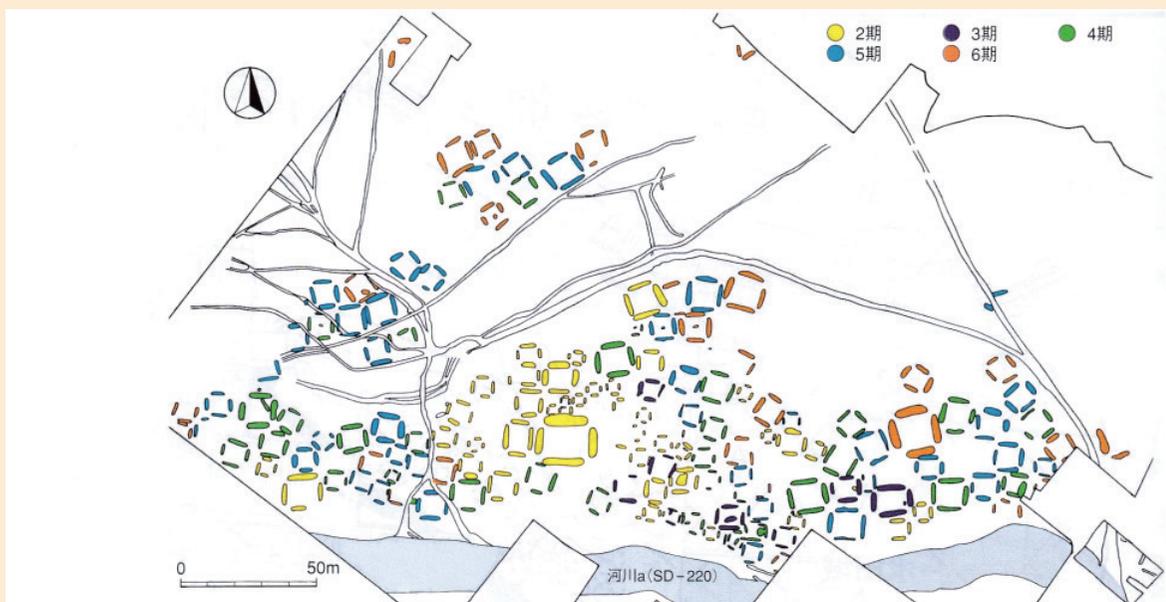


図1 常代遺跡墓域A分布図。遺跡の時期のうち、2期～6期にかけて方形周溝墓がまとめて造営された（千葉県史料研究財団2003）。

### ③ 弥生時代中期後葉

わたり次々と新たなお墓が築かれ、一大墓域を形成しました。

仮家塚遺跡では、四隅が切れるタイプの方形周溝墓が8基発見されました（コラム「仮家塚遺跡とは何か」参照）。墓群は南北より西に若干傾いて列状に配置され、埋葬施設は見つかっていません。最大の墓は一边16メートル超、3基は12メートル程、最小の墓は9メートル超と、それぞれ大型、中型、小型に分けられます。台地中央部墓群の配列から、最大の墓が最初に造営され、それを取り囲む4基が続いて造営されたと推定されます。

仮家塚遺跡の南側、滝川右岸に位置する宇戸台遺跡では、微高地上の東端から、四隅が切れるタイプの方形周溝墓5基が見つかりました（第2章「農耕集落」図1参照）。墓群は北西―南東軸に配列され、埋葬施設は見つかっていません。2基の方形周溝墓は一边が約14〜16メートル、1基の方形周溝墓は約12メートルと、仮家塚遺跡の大型、中型と同じサイズでした。

宇戸台遺跡の滝川対岸に位置する菅野遺跡では、環濠と考えられる2本の溝の間から、四隅が切れるタイプの方形周溝墓6基が見つかりました（第2章「農耕集落」図1・写真1参照）。完全に調査できたのは一边約12メートルと中型を呈する1基だけで、その他は一边か二辺だけの検出にとどまっています。南北墓群の間は空白域となっていますが、それは後世に地面が削られたためのように、実際にはさらに墓群が広がっていた可能性があります。

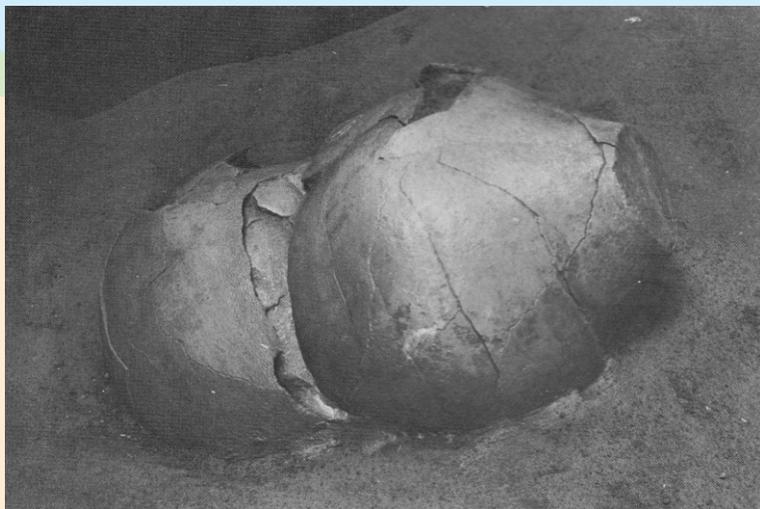


写真1 合口壺棺（安房国分寺遺跡）（滝口1980）

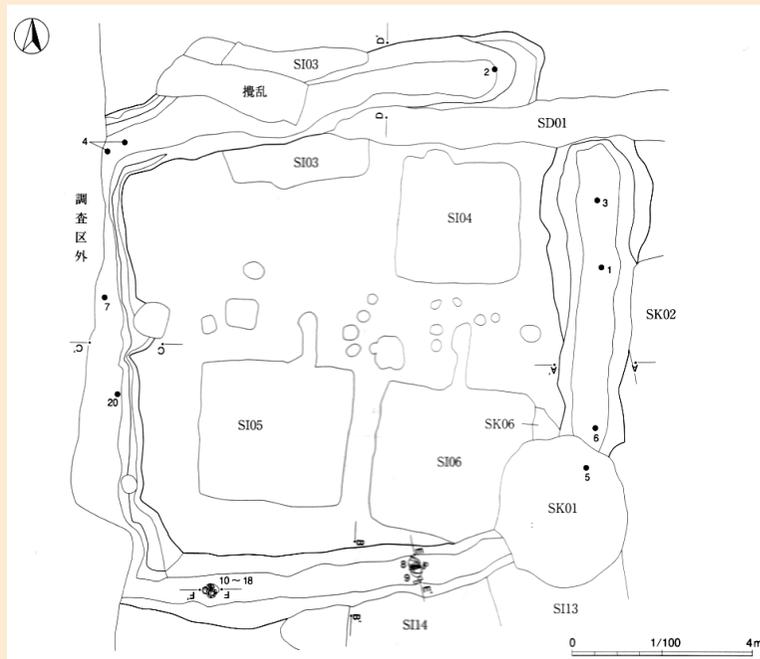


図2 方形周溝墓（腰越遺跡）。北東溝が切れている。数字のドットは土器などの出土地点を表す（折原2011）。



写真2 方形周溝墓出土土器（腰越遺跡）（折原2011）

#### ④ 弥生時代後期

これらの遺跡で見つかった方形周溝墓は基本的に一辺15メートル程度の大型、12メートル程度の中型、9メートル程度の小型に区別できます。墓の造営に同じ規範が認められる点は大変興味深いところです。

弥生後期になると、方形周溝墓は溝の四隅が切れるタイプから、

全周もしくは一隅が切れる形に変わり、土器の口を合わせた合口棺をもつ土器棺墓もよくみられるようになります。萱野遺跡の南側に位置する安房国分寺遺跡で出土した一对の合口壺棺【写真1】はその好例です。萱野遺跡の東側、滝川対岸に位置する腰越遺跡では、北東隅が切れるタイプの一辺約12メートルの方形周溝墓1基が見つかりました【図2】。周溝からは台付甕2点が合口の状態で出土しました【写真2】。調査区北側には1号周溝墓と形態が似た溝の一部も見つかっており、このエリアは弥生後期の墓群



写真3 方形周溝墓（薬師前堀ノ内遺跡稲子沢地点）。南側から撮影。写真奥の方形周溝墓北側と左側の一部は溝が欠けている（玉口編1978）。

だった可能性がありません。

館山平野南部の東田遺跡では、西半部がコの字型で露出したことから、平面形が全周型もしくは一隅が切れるタイプと推定される方形周溝墓1基が見つかりました。その他にも、東田遺跡では方形周溝墓の可能性があり、情報は断片的ですが、弥

生後期の墓が存在したようです。千倉地区では、瀬戸川左岸段丘上に位置する薬師前堀ノ内遺跡から、方形周溝墓の南西隅や、南東隅が切れる長軸約12メートル×短軸約9メートルの方形周溝墓が見つかりました。これらの墓は弥生後期の竪穴住居跡13軒が調査された第2次調査区の北側に分布していることから、集落域の北側エリアが墓域となっていた可能性があります。

瀬戸川右岸では、支流段丘上に位置する稲子沢遺跡から、北側と東側北半に溝がないコの字型の方形周溝墓が見つかりました【写真3】。床面付近から土器がまとまって出土し、覆土中からも勾玉、管玉、ガラス小玉が出土しました。

このように安房地方では、南関東の他の地域と同様、弥生中期後葉には四隅の切れるタイプの方形周溝墓が密集して造営されたのに対し、弥生後期には全周型や一隅が切れるタイプの方形周溝墓が独立的に構築されるようになります。安房地方では平面形が長方形を呈する墓が多いことが、一つの特徴として挙げられます。

### 5 弥生時代終末期

2世紀後半～3世紀前半の弥生終末期になると、在来の方形周溝墓から、古墳的な要素をもつ墳丘墓が造営されるようになります。萱野遺跡のB区南端に所在する萱野1号墳は、南北の周溝と西側周溝の一部が見つかり、南北の一边は34・2メートルを測ります（第2章「農耕集落」図1参照）。この墳丘墓は、検出された方形プランの東側に前方部を有する前方後方形だった可能性もあります。もしそうだとすれば、主丘部は60メートル超に復元することができ、館山平野最大の首長墓だった可能性もあります。出土した甕形土器は広域的な要素である口縁くの字型のものを主体としており、年代的には弥生終末期に位置づけられます。

宇戸台遺跡でも、墳丘が削平された古墳的な要素をもつ周溝が見つかりました。そのうち北側に位置する宇戸台2号墳は、前方



写真4 根方上ノ芝条里制E地点。弥生後期の竪穴住居跡26軒が調査された。写真左上の太い溝2本が墳丘墓。集落に接して造営された(野中ほか2000)。

部が突き出す前方後方形をしていました(第2章「農耕集落」図1参照)。墳丘が削平されているため正確な規模は不明ですが、全長は約12メートルと推定されます。出土した土器は、萱野1号墳より時期の下る弥生終末期でも後半段階に位置づけられます。また、宇戸台2号墳の南に隣接する1号墳も、2号墳と同じく北側に前方部をもつ前方後方形だった可能性があります。このように宇戸台遺跡では、弥生中期は方形周溝墓が、弥生終末期には墳丘墓が築かれ、一貫して墓域として利用されていたことがわかりました。

その他の地域では、長狭平野の根方上ノ芝条里跡E地点で、調査区西側から弥生終末期の隅が切れる周溝2条が見つかっています【写真4】。萱野遺跡や根方上ノ芝条里制E地点の墳丘墓は、ともに弥生後期の竪穴住居を壊して築かれており、それまでの集落域が墓域に変化した様子がうかがえます。

(杉山祐二)

## 7

## 石器——石の道具からわかる房総半島南端の生活・交流

南房総周辺は硬質の石材があまりなかった——  
しかし人びとは石斧を手に入れ、木製農耕具を使い  
稲作を行っていた。石器の観察から何が分かる？

\*\*\*

仮家塚遺跡とその周辺の遺跡から見つかっている石の道具＝石器から当時の様子をのぞいてみましょう。

## ① 大陸系磨製石器

弥生時代に朝鮮半島方面から稲作などと一緒に伝わった道具の一つに、大陸系磨製石器と呼ばれる石器があります。太形蛤刃石斧（木の伐採用）、柱状片刃石斧・扁平片刃石斧（木材の加工用）といった器種があり、弥生時代を特徴づける水田稲作に必要

な木製農耕具の製作以外にも、土地の開墾や竪穴住居の建築材確保など、生活になくはならない道具でした。しかし、仮家塚遺跡がある南房総周辺は石斧に適した硬質の石材があまり手に入らない地域です。しかし、当時の人びとは石斧を手に入れ、木製農耕具を手にし、実際に水田稲作をおこなっていました。どのように石斧を入手していたのでしょうか。石器の観察から何が分かるかみてみましょう。

## ② どこから手に入れた？

房総半島がある南関東周辺で出土する石斧の製作地がこれまでの発掘調査成果や研究の蓄積から判明しつつあります。一つ目は、長野盆地産の石斧です。長野県長野市の榎田遺跡や松原遺跡で製作された、榎田型磨製石斧と呼ばれる深い緑色をした石斧が南関東を含め北陸地方や東海地方にまで流通していたことが明らかになっています。二つ目は、東北地方南部の太平洋沿岸（現在のいわき市周辺）で製作された石斧です。福島県いわき市砂畑遺跡や



写真1 長野盆地で製作された榎田型磨製石斧（千葉県教育委員会所蔵、以下筆者撮影）



写真2 萱野遺跡の大陸系磨製石器類（千葉県教育委員会所蔵）



写真3 館山市笠名採集の挟入柱状片刃石斧（個人蔵（館山市立博物館保管））

栗木作遺跡、白岩堀ノ内遺跡などで製作されたことが確認され、房総半島や東北地方南部内で流通していたことが明らかになってきています。また、神奈川県西部域（相模川流域周辺）で製作された石斧も房総半島を含めた南関東地方に流通していたことが分かっています。それ以外にも小規模な製作地があったと思われるのですが、主要な製作地は上記の三つの地域と考えられます。

## 9 仮冢塚遺跡周辺で発掘された石斧類

仮冢塚遺跡周辺でも大陸系磨製石器が発掘調査で見つかっています。比較的大規模な調査が実施された館山市萱野遺跡ではいくつかの大陸系磨製石器が見つかり、写真1の太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧は長野盆地で製作された榎田型磨製石斧です。仮冢塚遺跡のすぐ近くにある宝珠院遺跡からも太形蛤刃石斧が出土しており、詳細は不明ですが平面形の特徴から長野盆地で製作されたも



写真4 恩田原遺跡の大陸系磨製石器類（南房総市教育委員会所蔵）

の可能性ががあります。萱野遺跡や館山市笠名で採集された扶入柱状片刃石斧は石材の特徴から神奈川県西部の相模川流域周辺で製作されたものと考えられます【写真2左上・写真3】。また、南房総市の恩田原遺跡から見つかった太形蛤刃石斧と萱野遺跡で見つかった小型の柱状片刃石斧は角閃石片麻岩と呼ばれる石材で製作されており、この石材は阿武隈山系で採取できることが確認されているもので、東北地方南部から流通したものと考えられます【写真2右下・写真4右】。

## ② 珍しい石庖丁

弥生時代に特徴的な道具の一つに石庖丁と呼ばれる稲穂を摘むための石器があります。教科書などにもよく取り上げられるので、ご存じの方も多いのではないかと思います。しかし、房総半島も含めた南関東地方では石庖丁はほとんど使われていなかったようです。代わりになる道具があったと想定されますが、現状ではよく分かっていません。発掘調査で見つかったものではありませんが、房総半島ではとても珍しい石庖丁が館山市笠名で見つかっています【図1】。これ以外に千葉県内では佐倉市大崎台遺跡で発掘されたものしかなく、大変珍しいものです。房総半島には石庖丁を製作する文化がないので、これも他地域からもたらされたものと考えられます。どこからもたらされたのかを特定するのは難しいですが、平面形の特徴は東北地方南部のものによく似ています。

## ③ 漁撈に使われた石器

仮塚遺跡の近くにある萱野遺跡・恩田原遺跡からは有頭石錘と呼ばれる漁撈に使用されたとみられる石の錘が見つかっています。このような石の錘は刺し網の錘という意見や、釣り漁の錘に使われたという意見があり、対岸の東京湾西岸域で盛んに使用されたものです。当時から海を通して東京湾西岸と人の往来があり、この有頭石錘も持ち込まれ使用されたものと考えられます【写真

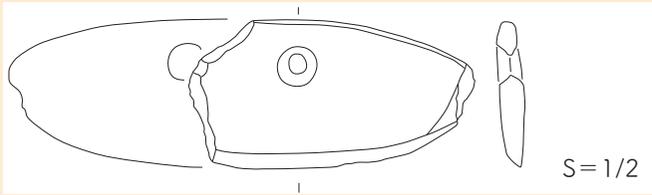


図1 館山市笠名採集の石庖丁（個人蔵（館山市立博物館保管）・筆者作成）



写真5 有頭石錘（萱野遺跡）（千葉県教育委員会蔵）



写真6 有頭石錘（恩田原遺跡）（南房総市教育委員会蔵）

5・6】。また、南房総市の恩田原遺跡では興味深い石製の漁撈具が見つかっています。九州型石錘と呼ばれる石錘に類似したもので、5点見つかっています【写真7】。九州型石錘とはその名の通り、北部九州を中心に製作・使用された石錘の一種で日本列島の沿岸部に点々と分布しています。恩田原遺跡で見つかった石錘も九州型石錘に類似しているものの、そのものとは言えず評価が難しい資料ですが、海を通じた交流は想像以上に広く、西日本

方面と交流があった可能性は捨てきれないでしょう。九州型石錘だけではなく、恩田原遺跡からは西日本的な土器も出土しており、注目されます【図2】。

#### ④ 弥生時代の祭祀具さいしぐ

仮家塚遺跡の近くにある、萱野遺跡からは変わった形の石器が

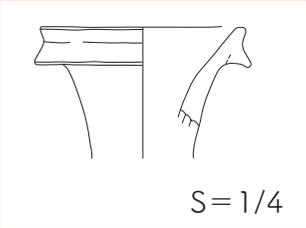


図2 恩田原遺跡の西日本的な土器（筆者作成）

見つかっています。環状石器と呼ばれる石器で、円形をした石器の中央に孔が開いている石器です。この石器は関東地方では弥生時代中期中葉以降に主に製作された石器で、木製の柄を差し込んだ状態で使用された祭祀のための道具



写真7 恩田原遺跡の九州型石錘？（南房総市教育委員会所蔵）



写真8 環状石器（萱野遺跡）（千葉県教育委員会所蔵）

### 5 勾玉類の製作

縄文時代以来、日本列島に特徴的に見られる装身具の一種に勾玉があります。弥生時代においても製作され、主な製作地は北陸地方や東北地方南部にありました。大半の勾玉類はそれらの地域から広域に流通することが分かっていますが、房総半島南部でもわずかながら製作されたようです。南房総市の恩田原遺跡ではそ

と考えられています。大陸系磨製石器と同様に、長野盆地や東北地方南部の太平洋沿岸で製作されたものが流通していますが、萱野遺跡のものは神奈川県西部（相模川流域）で製作されたものと考えられます【写真8】。相模川流域で採取できる富士玄武岩と呼ばれる富士山由来の石材で、相模川流域で大量に製作されていました。この環状石器も海を通じた東京湾西岸方面との交流でもたらされたのでしよう。



写真9 未成品の勾玉（右上2点）と素材となる原石（左）（南房総市教育委員会所蔵）



写真10 勾玉製作に使われたとみられる砥石（南房総市教育委員会所蔵）

ここで製作されていたことを示す、未成品（作りかけ）の勾玉【写真9 右上2点】と素材と見られる原石が見つかっています【写真9 左】。加えて勾玉製作に使われた砥石といと思われる石器がセットになっています【写真10】。これまで、房総半島南部が玉類の製作地という認識はほとんどされておらず、恩田原遺跡出土の玉類は貴重な情報を提供していると言えます。今後はその流通範囲の解明などが急がれます。

\* \* \*

このように、房総半島南端から見つかった石器類を観察すると、長野盆地や神奈川県西部、東北地方南部など、広域に及ぶ地域との交流があったことがうかがえます。また、勾玉類の製作地としての性格も見えてきました。これらの勾玉類はこの地から他地域へ流通していたのかもしれませんが。

ません。

本書の【コラム】「人が動く、石器も動く！」にもあるように、太平洋に突き出すという地理的な環境から、海上を通してさまざまな地域と交流を持ち、石器類も含めた必要な物資を手し、農耕文化を営んでいたのでしょう。

（小林 嵩）



## 当時の小学生がみた調査の記憶と

コラム執筆のお話しをいただいたとき、当時の小学生の記憶があってもおもしろいかもと思つてこの題名を提案させていただきました。筆者の実家は仮家塚遺跡の遺跡範囲内にあり、小学生の筆者は調査を間近で見っていました(もちろん、小学校から帰ってきてからですが)。当時の調査からすでに30年近くが過ぎているため、記憶がやや臆気ではありますが、お付き合いください。仮家塚遺跡は、田んぼの中にある丘の上にあります。周辺は、民家の他はほとんどが畑で、今回住居跡が見つかった土地は家畜用の背の高いトウモロコシが育てられていたところでした。周辺は、いわゆる新興住宅地が広がり、私が小学生の頃から今に至るまで、家の軒数や木々のあり方は多少変化しているものの、地形的には大きな変化

はありません。

遺跡名になっている「仮家塚」とは、この周辺一帯の旧地名(字)です。「塚」という地名は墓や墓域を示すことが多いのですが、周辺にお墓はないので、平安時代以前の墓を示す地名が現在まで残っていたのかもしれない。

さて、私が小学生の頃に行われた発掘調査ですが、どのように始まったかの記憶は残っていません。おそらく、小学校に行っている間にいろいろ準備されていたのだろうと思います。調査は、ベテランの作業員さんの他、母を含む近所のおばちゃんたちも参加していました。調査当時、小学校が終わって、15時半過ぎに帰宅後、宿題は後回しで現場に直行し、調査地をうろうろしていました。調査地は、家のすぐ目の前

でした。遺跡をのぞくと、地面は黒色で硬そうでした。

おばちゃんたちは、移植ゴテを使って丁寧に作業をされていました。周囲を歩くと遺跡の所々に土器片が転がっており、暗い橙色で変な形をしていると思つたものです。徐々に調査が進むと、溝の中から何やら形を保った土器が土で作った柱の上にありました。調査員さんに「土柱を崩さないようにね」と注意されたことを覚えています。また、平安時代の人骨が納められた壺が出てきましたが、半分ぐらい掘り出した状態で線香が供えられていました。幼心に少し怖いと思いました。

三芳村立三芳小学校の先生たち(当時)が何名か調査を見学に来られました。先生たちが調査担当者の説明をじっくりと聞き

ながら遺構と土器を見ていました。一人の先生が、平安時代の骨壺と中から取り出した焼骨を興味深く見ていたことを印象深く覚えています。

調査が終了した後、埋め戻しまで時間が空いており、調査区内で遊びまわっていました。方形周溝墓の溝に弟と出たり入ったりしていました。溝の深さが小学生が軽く飛び上がれるくらいのちょうどいい深さでした。その後、しばらくして調査地は埋め戻され、いつもの畑に戻りました。

その後、大学に入学して、とある研究会に参加した際、出身地を遺跡名で話したことがあります。仮家塚遺跡は、当時の千葉県内における方形周溝墓の最南端にあたる遺跡として知られており、千葉県内や南関東の弥生時代の研究者には、有名な遺跡でした。そのため、仮家塚遺跡から出土した遺構・遺物は『考古資料大観』（小学館）や『関東の方形周溝墓』（同成社）など全国の研究者が読む本にも掲載されています。千葉県庁のHP内に埋蔵文化財包蔵地を示す地図『ふさの国文化財ナビゲーション』というページがあります（<https://map.pref.chiba.lg.jp/pref-chiba/PositionSelect?mid=30>）。ページには、遺跡がたくさん載っており、遺跡は意外と多いことが確認できます【図1】。読者の皆さんの家の下も遺跡かもしれません。ぜひ確認してみてください。

（千葉まい子）



図1 『ふさの国文化財ナビゲーション』「埋蔵文化財包蔵地」トップページ



## 南房総の海蝕洞穴遺跡

### 館山市大寺山洞穴遺跡を例に

仮家塚遺跡では、弥生時代に水稻耕作に携わった南房総地域における人びとの活動痕跡が残されています。では、南房総地域では、他にどのような古い時代の人びとの活動の跡を見ることができのでしょうか。

この地域の特徴的な遺跡として挙げられるのが、海の波浪作用によって作られた海蝕洞穴を利用した洞穴遺跡です。

海蝕洞穴は、通常、波打ち際の海岸線に立地しています。そのため、全国的に多くの海蝕洞穴は、標高5メートル前後の海辺にあります。しかし、南房総地域の海蝕洞穴遺跡の中には、海岸線から離れ、標高が高いところに立地するものが存在しています。特に、館山市の海蝕洞穴遺跡ではそうしたものが多く、中には標高25メートル前後の高台に位置しているものもあります。

これは、縄文時代に起こった海進と海退、そして土地の大幅な隆起によるものです。

そうした海蝕洞穴遺跡の一つが、大寺山洞穴遺跡です。大寺山洞穴遺跡は、海岸線まで約500メートルの距離があり、三つの洞穴が開口しています。南からそれぞれ、第1洞、第2洞、第3洞と呼ばれており、標高は第1洞が最も高く、30・7メートル、第3洞が最も低く、26・5メートル、第2洞がその中間の28・0メートルとなっています。第1洞は奥行きが29・0メートルで、第2・3洞は計測が出来ていないものの、同じく30メートル近くあると考えられています。

大寺山洞穴遺跡を最初に利用したのは、縄文時代の人びとです。三つの洞穴とも縄文時代の包含層（遺物を含んだ土層）が確認

されています。縄文時代の遺物は、土器や骨角器（漁撈具・装身具）、食料として利用した魚類やイルカの骨、貝類等が出土しており、それらとともに埋葬された人骨も出土しています【写真1】。こうした様相から、大寺山洞穴遺跡は単なる居住の場というより、漁撈活動の最前線基地としての役割を持っていたと考えられます。さらに、日常の生活空間と死後の埋葬空間が混在していることから、生者と死者の空間が未分化であったことがうかがえます。

続く弥生時代には、大寺山洞穴遺跡での人びとの活動の痕跡は見られませんが、古墳時代になると再び人びとの活動の場となっています。ただし、縄文時代とは異なり、今度は生活の場ではなく、完全に埋葬・葬送の場として利用されています。特徴的



写真1 第3洞の縄文時代の人骨出土状態（岡本2020）



写真2 第1洞の6号舟棺の人骨出土状態（岡本2020）

なのが、丸木舟を棺に用いた「舟棺」が多数出土していることです【写真2】。いわゆる「舟葬」が行われていたと考えられています。「舟葬」とは、海の向こうにあの世・死後の世界があると考え、そこに死者

を運ぶ手段は舟だとして、舟を棺として遺体を埋葬したりするものです。それを示すように、大寺山洞穴遺跡で見つかった「舟棺」はいずれも触先が海に向けて置かれていました。また、出土した土器類や鉄製品、

装身具等の副葬品は、いずれも東国の大型前方後円墳出土のもの比べて遜色のない品々であることから、埋葬された人びとは、そうした古墳を作った地方の王たちと同様に強い力を持ち、ヤマト王権との繋がりのあつた海の民の首長であつたと考えられます。

「舟葬」は、大寺山洞穴遺跡近くの鉦切洞穴遺跡等でも行われていた可能性があることから、南房総地域では、古墳時代にはすでに、海を意識した「海上他界観」、すなわち、海の向こうにあの世があるという、今も海辺の地域に見られる考えが形成されていたのではないかと考えられています。

（廣田哲徳）

# 参考文献

## 1 時代と文化―弥生時代と仮家塚遺跡

蒔田鎗次郎・野中完一 1987 『弥生式土器』『東京人類学会雑誌』12-1338  
佐原真 1975 『農業の開始と階級社会の形成』『岩波講座日本歴史 原始および古代』1 岩波講座

白石哲也 2023 『宮ノ台式土器成立期の移動・移住―相模湾沿岸地域を対象として―』『法政考古』49

末永雅雄・小林行雄・藤岡健二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究室報告第16冊

ティム・インゴルド(訳)金子悠・水野友美子・小林耕二 2017 『メイキング』左右社

## 【コラム】仮家塚遺跡とは何か

大淵淳志・小川和博 1994 『安房仮家塚―房総半島南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査』千葉県三芳村教育委員会

仮家塚遺跡発掘調査団 2024 『第8次仮家塚遺跡発掘調査概報―2021年度の調査報告―』『法政考古』49

白石哲也・杉山祐一・小倉淳一・根本岳史・植田雄己・小林嵩・佐藤兼理 2023 『第8次仮家塚遺跡発掘調査概報―2021年度の調査報告―』『法政考古』49

総南文化財センター 2000 『年報 No.11』

千葉縣安房郡教育會編 1921 『第十七章 町村誌』『千葉縣安房郡誌』

中野修秀・新井和之 1991 『千葉縣安房郡三芳村 仮家塚遺跡―個人住宅建設に伴う発掘調査報告書―』千葉県三芳村教育委員会

## 2 農耕集落―その誕生と社会変動

大淵淳志・小川和博 1994 『安房仮家塚―房総半島南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査―』千葉県三芳村教育委員会

白井久美子・小林信一 2010 『館山市萱野遺跡―宇戸台遺跡―地方道路交付金委託富津立山線埋蔵文化財調査報告―』千葉県県土整備部・財団法人千葉県教育振興財団

城田義友 2005 『緊急地方道路整備委託(館山大貫千倉線)埋蔵文化財調査報告書―館山市長須賀条里制遺跡―東山遺跡―』千葉県県土整備部・財団法人千葉県文化財センター

高梨友子 2006a 『館山市東田遺跡―国道410号(北条)埋蔵文化財調査報告書2―』千葉県県土整備部・財団法人千葉県文化財センター

高梨友子 2006b 『館山市長須賀条里制遺跡―一般国道410号道路改築事業(大坪)埋蔵文化財調査報告書』千葉県県土整備部・財団法人千葉県教育振興財団

千葉県史料研究財団 2003 『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』

千葉大学文学部考古学研究室 2002 『原始・古代安房国の特質と海上交通』岡本東三編

土屋治男・城田義友・高梨友子 2004 『館山市長須賀条里制遺跡―北条条里制遺跡―国道410号(北条)埋蔵文化財調査報告書1―(財)千葉県文化財センター』

野中徹・杉山春信・杉山奈津子・高梨俊夫 2000 『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書―ほ場整備事業(大区画)東条地区に伴う埋蔵文化財調査―』鴨川市遺跡調査会

## 3 土器―稲作農耕社会を物語る宮ノ台式土器

安藤広道 1990 『神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分―上・下―』古代文化』42-6:7 古代学協会

安藤広道 1991 『弥生時代集落群の動態』『調査研究集録』第8冊 横浜市埋蔵文化財センター

石井寛 1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会

大淵淳志・小川和博 1994 『安房仮家塚 房総半島南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査』三芳村教育委員会

岡本勇ほか 1994 『大塚遺跡II港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XV』財団法人横浜市ふるさと歴史財団

小倉淳一 1996 『東京湾東岸地域の宮ノ台式土器』『史館』27 史館同人

小倉淳一 2022 『土器と集落からみる弥生時代中期の南関東』『南関東の弥生文化』東からの視点』大阪府立弥生文化博物館

柿沼修平ほか 1985 『大崎台遺跡発掘調査報告』I 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

柿沼修平ほか 1986 『大崎台遺跡発掘調査報告』II 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

柿沼修平ほか 1987 『大崎台遺跡発掘調査報告』III 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会

柿沼修平・高橋誠 1997 『大崎台遺跡発掘調査報告』IV 佐倉市教育委員会

杉原狂介 1935 『上総宮ノ台遺跡調査概報』『考古学』6-7 東京考古学会

滝沢亮・小林義典ほか 2004 『小田原市文化財調査報告書120 多古墳遺跡第2分冊(第4地点)』小田原市教育委員会

武井則道編 1994 『大塚遺跡港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XII』横浜市埋蔵文化財センター

田村良照ほか 2021 『神奈川県小田原市久野多古墳遺跡―V地点 第1分冊―』社会福祉法人湖成会 有限会社相模考古学研究所

## 4 地理と考古学調査―南房総の歴史はどう解明されてきたか

ここに記した文献の他に、平成の市町村合併前の安房郡市の各市町村史を参考にした。なお、各遺跡の発掘調査報告書と学術誌論文は省略した。

大野延太郎 1900 『安房国安房郡東長田村遺跡二付テ』『東京人類学会雑誌』15-167(復刻版1981年 第一書房)

館山市立博物館1990『企画展 ほりだされた安房の遺跡』図録  
館山市立博物館1994『企画展 神々の風景』図録  
館山市立博物館2010『館山市市制施行70周年記念特別展図録 館山湾の洞窟遺跡』  
千葉県史料研究財団2000『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』  
千葉県史料研究財団2003『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』  
地方史研究協議会編1973『房総地方史の研究』

### 5 住居—房総半島の竪穴住居と仮家塚遺跡が重要な理由

荒海川表遺跡10号竪穴住居2001『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告』千葉県史料研究財団  
市原市菊間遺跡26号住居1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会  
小田原市中里遺跡5号住居2015『神奈川県小田原市中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所  
小林謙一2004『縄文社会研究の新視点—炭素14年代測の利用—』六一書房  
設楽博巳2006『関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程』『国立歴史民俗博物館研究報告』133  
都出比呂志1985『弥生時代住居の西と東』『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部(都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』114~140頁 岩波書店に補足付再録)  
中野谷原遺跡16号住居2004『中野谷地区遺跡群2』群馬県安中市教育委員会  
横浜大塚・歳勝土遺跡<1>号住居1991『大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター  
【コラム】発掘ってこんな感じ!  
文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編』六一書房

### 6 墓—仮家塚遺跡の方形周溝墓と弥生時代のお墓

安藤広道2022『弥生時代ガイドブック』新泉社  
大塚初重・井上裕弘1969『方形周溝墓の研究』『駿台史学』24  
折原洋一2011『館山市腰越遺跡—特別養護老人ホーム新設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』株式会社ノガミ  
滝口宏1980『安房国分寺』千葉県館山市教育委員会  
玉口時雄編1978『健田遺跡』朝夷地区教育委員会  
千葉県史料研究財団2003『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』  
福豆田佳男2011『二 墓地の構造と階層社会の成立』講座日本の考古学6 弥生時代 下 青木書店  
野中徹・杉山春信・杉山奈津子・高梨俊夫2000『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書—ほ場整備事業(大区画) 東条地区に伴う埋蔵文化財調査—』鴨川市遺跡調査会

### 7 石器—石の道具からわかる房総半島南端の生活・交流

新井正樹1998『駿河湾の有頭石錘について—西部を中心とした地域の検討—』『静

岡の考古学』植松章八先生還暦記念論文集『静岡の考古学』編集委員会 79~97頁  
安藤杜夫・松田政基1998『千葉県富山町 恩田原遺跡 県営ほ場整備事業岩井地区埋蔵文化財調査』富山町教育委員会

今泉潔1988『古代寺院跡(宝珠院)確認調査報告』財団法人千葉県文化財センター  
小林高2018『千葉県南房総市恩田原遺跡の遺構・遺物が提起する課題』『貝塚』73 物質文化研究会 1~5頁  
小林高2021『関東地方における環状石器の基礎的研究』『駿台史学』172 駿台史学会 57~81頁

小林高2022『房総半島における大陸系磨製石器の出現・消滅・流通・保有』『千葉遺跡研究』1 房総文化研究会 81~95頁  
白井久美子・小林信一2010『館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡—地方道路交付金委託富津館山線埋蔵文化財調査報告書—』(千葉県教育振興財団調査報告)639(財団法人千葉県教育振興財団)

高村公之1991『有頭石錘小攷』『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』36 横須賀市人文博物館 79~100頁  
中泉雄太・田切美智雄2017『茨城県日立市における磨製石斧の石材及びその産出地について』『日立市郷土博物館紀要』12 日立市郷土博物館 3~20頁

馬場伸一郎2001a『南関東弥生中期の地域社会(上)—石器石材の流通と石器製作技術を中心に—』『古代文化』53-5 財団法人古代学協会 18~28頁  
馬場伸一郎2001b『南関東弥生中期の地域社会(下)—石器石材の流通と石器製作技術を中心に—』『古代文化』53-6 財団法人古代学協会 17~25頁

馬場伸一郎2003『覆田型磨製石斧の再検討—新屋敷遺跡第2地点(台の城山遺跡)と長野盆地の弥生中期後半における太形蛤刃石斧の比較検討から—』『埼玉考古』38 弥生時代特集 埼玉考古学会 1003~1117頁

【コラム】南房総の海蝕洞穴遺跡—館山市大寺山洞穴遺跡を例に  
岡本東三2020『海上他界のコスモロジー 大寺山洞穴の舟葬墓』  
館山市立博物館2010『館山市市制施行70周年記念特別展図録 館山湾の洞窟遺跡—棺になった舟。黄泉の国への憧憬—』

協力機関・謝辞…伊丹徹・大島慎一・岡山亮子・加納実・河合英夫・酒切喜洋・谷口肇・野中祐介・林原利明・宮坂新・館山市立博物館・千葉県教育庁・南房総市教育委員会

仮家塚遺跡の研究は、日本学術振興会・若手研究(20K13229)「弥生人と魚食文化—米と魚の食卓の始まりを探る—」(代表:白石哲也)、同・若手研究(23K12306)「弥生時代のコメと魚の食文化—内陸部の魚料理を解明する—」(代表:白石哲也)・学術変革領域研究(A)BOT計画班(24H0219)「人は「暴れる気候」にどう対応したか—年縞研究と日本考古学とのコラボレーション—」(代表:伊藤雄一郎)の支援が無ければ実施できないものである。ここに、記して感謝を申し上げます。

67 参考文献

## 執筆者一覧 (掲載順)

### ・編者

白石哲也 (しろいし・てつや)

山形大学学士課程基盤教育院。研究分野は考古学。

主要な著書・論文に「宮ノ台式土器成立期の移動・移住―相模湾沿岸地域を対象として」(『法政考古』49、2023年)、「第6章 土器付着炭化物から見る池子遺跡」(共著、『弥生時代 食の多角的研究 池子遺跡を科学する』六一書房、2018年)、「弥生時代における鳥形土製品の役割」(『古代』139、2016年)など。

### ・執筆者

杉山祐一 (すぎやま・ゆういち) 印西市役所

小倉淳一 (おぐら・じゅんいち) 法政大学文学部史学科

池田 治 (いけだ・おさむ) 公益財団法人かながわ考古学財団

杉山功成 (すぎやま・こうせい) 静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課

佐藤兼理 (さとう・けんり) 神奈川県立歴史博物館

根本岳史 (ねもと・たけふみ) 印西市教育委員会

小林 嵩 (こばやし・こう) 公益財団法人千葉市教育振興財団

千葉まい子 (ちば・まいこ) 株式会社武蔵文化財研究所

廣田哲徳 (ひろた・あきのり) 館山市役所

# かりやぶか いせき 仮家塚遺跡！ 南房総最古の農村を探して

2025（令和7）年3月31日 第1版第1刷発行

ISBN 978-4-86766-084-3 C0021 ©著作権は各執筆者にあります

### 発行所

株式会社 文学通信

〒113-0022 東京都文京区千駄木2-31-3 サンウッド文京千駄木フラッツ1階101

電話 03-5939-9027 Fax 03-5939-9094 メール info@bungaku-report.com ウェブ <http://bungaku-report.com>

発行人 岡田圭介

※書影は自由にお使いください。



ご意見・ご感想はこちら  
からも送れます。上記  
のQRコードを読み取っ  
てください。